
私とAクラスと召喚獣

Scarlet ZoomAir After The Fainal

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私とAクラスと召喚獣

【Nコード】

N0103S

【作者名】

Scarlet ZoomAir After The Fainal

【あらすじ】

東方projectの要素とめだかボックスの要素が少し入ったらどうなるかなあ・・・とか思ってたみたww更新は不定期です！（キリッ 只今清涼祭編

こんなの咲夜じゃない！！ と思うと思いますが許容してくださいと嬉しいです。名前が一緒の別人と考えると構いません！

：多分。 評価をしてけると私は泣いて喜びます。

PV：86，278アクセス

ユニーク：14，572人 総合評価

299pt 有難う御座います

プロローグ

「あれ？知らない天井だ」

俺の名前は『剛田 桜華』。渾名は『ジャイアン』。ドラえもののジャイアンと同じ名字だからジャイアン。……なんだか泣けてくる。でも名前は女みたいと言われるよりはまだマシだと思う。……そうでもないか。

さて、目が覚めると知らない天井。自分が出したとは思えない全く別人の声。……うんーテンプレだな。

【おっ、目を覚ましたみたいだね。おはよう。】

そんなことを思っているといきなり聞こえるこの脳内に直接話しかけてくるような感じの声。あれ？何気に俺って冷静だな。違うか。諦めの領域に入ってるからだな。兎に角話を聞いておこつ。無心にいくぜ！無心になあ！！

少し台本書き入ります。

桜「おはようございます。誰ですか？」

？【神ですがなにか）．．．（キリッ】

桜「そうですか。で、これはどういう状況ですか？」

神【あ、別に口に出さなくても話せますよ？】

桜【あつ、そう？で、どういう状況？】

神【はい。あなたを死なせてしまったので転生していただきました。
】

桜【あゝ、やっぱりテンプレ的状况？】

神【はい。そこでやはり能力をあげようかと思ひまして。】

桜【了解了解。その前にこの世界ってどこ？】

神【バカでテストと召喚獣の世界ですね。後、東方も混じってます。
】

桜【じゃあ、幻想を司る程度の能力で。ま、簡単に言えばなんでもできる能力だね。】

神【わかりました。……はい、できました。次に設定なんです、
あなたは幻想郷に住んでいて、レミリアとフランドールの姉で紅魔

館の主という設定です。明日から文月学園に入学になります。なにか困ったことがありましたら私を呼んで下さい。】

桜【了解。なんて呼べばいい？】

神【では『神^{シン}』と。あ、あと名前も変えておいて下さいね。それでは。】

桜【はい。またね。】

台本書き終了です。

……。え？姉って？俺って性転換してるの！？しかもバカテスと東方ってww

しかも入学が明日って急だしww

もうどうにでもなれ（・・・）シュン

兎に角考えないとな……。色々と……。

私と個人情報と・・・（ネタバレ注意）

名前

桜華・S・T・天月

オウカ・スカーレット・ティレイ・アマツキ

O u k a S c a r l e t T h i r e i A m a t u k i

容姿

緋色の眼をして、金髪に青紫色のメッシュが入っている髪をポニーテイルにしている。髪が長く、ポニーテイルを外すと膝のあたりまであり、ポニーテイルをしている時もお尻の少し上のところになる。眼の下から頬にかけて赤い刺青がある。

性別

女性

種族

吸血鬼

能力

幻想を司る程度の能力

詳細

転生者。『東方project』の紅魔館の主。スカーレット姉妹が妹に当たる。『めだかボックス』の異常・過負担を能力を使ってすべて使えるようにしている。

また、異常と過負担はオンとオフの切り替えができるようにしている。幻想卿から出るとオフにしている。（幻想卿では常時オンにしている。）完全記憶能力を能力を使って所持しており、いつも高得点を取っている。表にはださないが極度のシスコンと言っている程に妹を溺愛している。

召喚獣

動物のモデルは白虎。眼から頬にかけて赤い刺青が入っている。防具は上がサラシで、下が黒で青いラインが入った長ズボン。出現方法は魔方陣が描かれるとその中心から七つの色にそれぞれ分かれ

た炎が現れ、魔法陣の周りを回る。そして、何回か回った後にまた中心に行き、大きな虹色の炎が出来上がる。その炎を縦に切り裂き出現。武器は二本の日本刀。

腕輪

『呪縛せし兎と禁忌を犯せし道化師（サージウムーン・クラウン ビッティション）』

- ・スペルカードを召喚獣が使うことができる
- ・自分が知っている幻想郷の能力を扱うことができる
- ・周りにいる仲間の点数を吸収して自身の召喚獣の点数として扱うことができる

イザヨイ
十六夜 サクヤ
咲夜

容姿

銀髪、青眼。常時メイド服。怒ると赤眼になる。

性別

女性

種族

人間

能力

時を操る程度の能力

詳細

原作の咲夜とほとんど一緒。だが、桜華のこととなると別人のように性格が変わる。

召喚獣

動物のモデルは犬。武器は咲夜お気に入り銀製のナイフ。防具はメイド服。出現方法は魔法陣が描かれた後、懐中時計が現れ、それが割れると片膝をついた咲夜が現れる。

腕輪

『ジャラルメント・ファンタジア
時空幻想奇術』

- ・スペルカードを扱うことができる
- ・他人の召喚獣と合体することができる
- ・他人の召喚獣の動きを模倣できる

私と咲夜と幻想と・・・

はい、どうも。前回、いきなりすぎてまったくついていけなかった
剛田 桜華です。

とにかく名前を考えてます。

「……兎に角、桜華は残そう。女の子になつたし、いきなり変えたら分からなくなるからな。」

そう、女の子になつたのだ。意味不明。解析不能。後で姿だけでも見とこう。うん、そうしよう。

でも、なんだか見た限りそれなりに胸は大きいぞ？うん。紅魔館組に恨まれそう。

まあ、今は名前だ。

桜華……なんだか格好いいのがいいな。…スカーレットはいれるだろ？……そういえば神か…神に転生させて貰ったんだっらちよつとぐらい名前貰ってもいいよな？いや、理屈は通ってないけどな？

神で思い付くのはやっぱりメジャーな天照大神と月詠とかだよな…
…一文字ずつ貰うか。天と月で天月だな。

これでハーフ風に桜華・S・天月だな。
スカーレット

え？なんでハーフ風なのかって？格好いいからだかなにか？（、・

・）キリッ

でもなんだか足りないなあ……。適当につくつとくかな……。アルファベット順にいくとTだからTにしよう。

T……ていー……。ティロイター？誰だよ。……ティレインスター？……アレイスターみたいだな。まあ、深く考えるのも面倒くさいしティレイでいいだろ。

オウカ スカーレヲドレイアマツキ
桜華・S・T・天月。

うん。格好いいじゃないか。合格だ。

後、俺から私にしとけばなんとかなるだろ。じゃあ次に、自分がどんな容姿してるかだな……。ブスだったらいやだな……。まあ、大丈夫だとおもうけど

さあ、いざー！

「……………。え？誰？この可愛い子」

あつれ……。これ本当に鏡？誰だよこのべっぴんさん。

身長は165cm前後で胸は少なくともCはある。髪の毛は金髪で所々に青紫色が混ざっている。切れ長の眼は赤く、緋色が一番近い。細長く整った眉毛。背中にはレミリアのような羽。それと腰のあたりにもフランのような羽がついている。服も紅と黒をベースにした洋服で、所々にフリルがついていて可愛い。

もう一度言おう。誰？この可愛い子。

「と、兎に角俺への認識を当たり前に定着させるか。」

幻想を司る程度の能力で幻想郷全域に私への存在を紅魔館の主と認識させる。これで大丈夫なはずだ。

次に、自身の妖力を無限に、体力を無限に、自身を神祖化して……と。

咲夜を呼んでみてなんともなかったら完了だな。あゝ、でもどう呼ぼうかな……。叫んだら来るかな？

「さーくーやー!!」

「お呼びでしょうかお嬢様。」

ふおおあちゃあ!?!いきなり現れるとかビックリするわ。『時間を操る程度の能力』かぁ……。俺にはきかないようにしようかな……。まあ、後でいいや。

「レミリアとフランはどうしてる?」

俺が紅魔館の主になるんだったらフランもレミリアも外に出してあげたいしね。ああ、フランとレミリアっていうのは俺の妹にあたる『フラワードール・スカーレット』と『レミリア・スカーレット』の

ことだ。

「まだ二人とも寝ているようです。」

まだ寝てるのか…。今何時だろ？

「咲夜。今は何時だ？」

「早朝8時です。」

そりゃ寝てるわな。吸血鬼つつ夜型だし

「そうか、じゃあ二人の吸血鬼の弱点をなくしに行くぞ。案内してくれ。」

「了解しました。此方です。」

） side 咲夜 （

初めまして。私の名前は『十六夜 咲夜』私の朝はいつも早い。私
がこの紅魔館の主、桜華・S・T・天月様に拾われてから数年がた
った。あの時のことはよく覚えてる。

あれは私が切り裂きジャックと呼ばれ、殺人をやっていた頃のこと。
私は五、六人目を殺した後、私は珍しくミスをしてしまい大怪我を
してしまった時だ。街の近くの森へと隠れていた時、深紅に染まっ
た館を見つけた。その館は近頃街中で吸血鬼が住む館と噂されてい
る所だとすぐに気がついた。私が住む街には館などいくらでもあつ
たがここまで深紅に染まった館などなく。カタログにのるような普
通の館ばかりだった。血のように紅い赤。一目惚れした。血になれ
た私はすごく魅力的にみえ、惹かれてしまった。

その時私は自分が大怪我をしていたことなどすっかり忘れてしまい
この館をのつとることしか考えられなかった。

今思うとバカをしたものだ。しかし、そのおかげで桜華様に出逢え
たのだ。よくやった、過去の自分。

乗り込んだは良いものの、私は門番に軽くあしらわれてしまった。
その時から今までずっと紅魔館の門番をしていた『紅 美鈴』に。

そして怪我のせいもあって私は虫の息にされてしまった。その時、
館からでてきた。まさに幻想的な風貌を纏った少女が現れた。

「美鈴、どうかした？」

「はい。この人間が館に侵入しようとしてきたので追ひ払いまし

た。もう虫の息ですが。」

「そう、よくやったわ。」

そう言うとその少女は私に向かって歩いてきた。後ろで『危険です』など聞こえてきたが私は無視して少女を必死に見ていた。ただ私に向かつて歩いてきてるだけ。それだけなのに私は消えかけている命の灯火を無理やり灯らせて少女をじつとみていた。歩いてきてるだけなのに全てが美しく、夢げに見える。一つ一つの仕草が幻想的で思わず惚けてしまった。

少女は私の前まできて止まると、一言。

「来なさい。」

『来なさい。』。ただの一言が私の心の奥底に響き渡り、瞬時に私はさながら騎士のように片膝を地面につけ答えていた。

「畏まりました。」

と。その後、私は自身の怪我が完全に消えていることに気がついた。しかし、不思議と気にならなかった。全てこの少女がやったのだと理解したから。

次の日の朝、私は少女に自分の名前を教え、自分の専属メイド兼紅魔館のメイド長になるように命じてきた。普通なら殺されてもおかしくなかった状況なのに助けられたことに疑問に思わなかったと言えは嘘になる。気紛れ？食料にするため？思い浮かぶ全ての考えがその時、全て否定された。普通に。なんでもないかのように。私の考えは全て外された。

「何故生かしたか？簡単よ。欲しかったから。」

たったこれだけの言葉。子供のような理由。なのに私はこの言葉でこの少女、桜華・スカーレット・ティレイ・天月様に絶対的な忠誠を誓った。

このとき、この瞬間。ここに『完全で瀟洒な従者』が生まれた。

私と日陰少女と司書と・・・

「咲夜、案内してくれと頼んだのに悪いんだけどレミリアをフランクの部屋まで連れてきてくれないかしら？私も準備とかもあるから能力は使わなくてもいいわ。」

「かしこまりました。では言つてまいります。」

どうも。なぜか超絶美少女になっていた剛田 桜華改め桜華・S・T・天月です。とにかく言葉づかいを女っぽく、そして紅魔館の主にふさわしいようにしてみました。一人称も俺から私に変えてますよ？

今、私は咲夜と別れてフランクの部屋に向かっています。え？そんなの知ってる？まあまあ、そんなこと言わずに聞いて下さいよ。実はね？私って……………紅魔館の敷地内がどうなってるのか全く知らないんですよ。え？いやいや、バカとか言わないでください。私は明久じゃないんですから。

え？そこまでいってない？それは失礼しました。バカって言われたら明久と同類と言われていると感じてしまつて……。アホならいいのかって？いいですよ？むしろどんどん言ってください。アホなのは知ってるので。

今はそんな話をしている時ではありませんでしたね。どうしたらいいと思いますか？

はい。そのあなた。

え？能力で敷地内の地図を脳に記憶させればいいって？

いやね？それも考えたんですけど間違つて脳に損傷とかさしたら危ないじゃないですか。え？それも能力で脳を補助・保護するバリア的なものでも張ったらいいんじゃないかって？

……。それは盲点でした。皆さんって頭いいんですね？違う？ああ、私の頭がアレなだけなんです。わかります。

ではさつそく失礼しますね？……。……はい、できました。ちよつとそこ！『うわゝ、こいつチートだわ。ウツゼー』とか言わないでください！！まったく、失礼しちやいます。せめてアホと言ってください。それなら許します。

「……。なんだか複雑な構造になつてゐるわね。図書館の地下ね。」

なんで図書館の下なの？とか言われそうだから言つときますね。図書館には管理人をしてもらつてゐる『パチュリー・ノーレッジ』がいる。通称『パチエ』。パチュリーとは『火＋水＋木＋金＋土＋日＋月を操る程度の能力』を持つてゐる生まれながらの魔法使いと言われゐる魔女だ。レミリアとは親友でレミリアの姉である私は必然的に会つことになった。そうしてパチュリーの力量をしっかりと把握した私はパチュリーを紅魔館の図書館の管理人を任せることにし、フランをできるだけ外に出さないように結界の管理などをしてもらつてゐる……。らしい。なんでらしい？とか聞かないよね？私も今知っ

たからに決まってるじゃん。さつき転生してきたばっかだよ？そんな感じ全くしないけど。ずっとここにいましたって言ったほうがなんだか違和感無いんだけどね？

まあ、そんなこんな言ってる間についてしまいましたー。図書館のほうだけどね？

「あれ？桜華様どうかなさったんですか？」

「ああ、こあ。ちょっとフランに用があつてね。」

この私に声をかけてきた人物は『小悪魔』^{「コあくま」}。通称『こあ』。この図書館で司書をやってもらってる……らしい。なんでらしい？とかきかn(r)y

「妹様ですか？」

「ええ。とにかくパチエのところまで連れてってくれないかしら？」

「わかりました。」

こちらです。と言って私を誘導するこあ。司書といっても簡単に言うとかパチエのお手伝的な感じだけど。まあ、パチエは嘆息持ちだからおおいに助かってるんだけどね。え？そんな設定初めて聞いた？うっそだ。私ちゃんと言ったよ？え？言つてない？……。えー

とね？うん。なんかごめんなさい。
とにかく嘆息持ってたんだよ。うん。べ、別に言い忘れてたとかじゃないんだk（ry

「パチユリー様、桜華様がきましたよー。」

私がついて行った先には本の山があつた。ここはちょうど図書館の中央部分にあたる。パチエは大体の時間をここで魔道書を読んだりして過ごしている。パチエはこゝの声を聞くと視線だけこちらによこした。

「あら？邪魔しちゃったかしら？」

「ええ。今凄くいいところだったのに……」

はたして魔道書にいい所も悪いところもあるのだろうか。気分的な問題なんだろうか？まあ、どうでもいいことだな。

うん？男口調に戻ってる？いやね？説明する時ぐらい良くない？一人称は私だし。いやいやいや、面倒になったとかじゃないよ？ホントダヨ？

「それは悪かったわ。ちょっとパチエの負担を少なくしようと思つてたのだけど……いらないようね？」

「すみませんでした。」

パチュリーはスペルカード『秘技 ジャンピン土下座』を使ったようだ。え？キャラ崩壊？そんなの知らないゾ

てかどうやって椅子の上からそんな綺麗なジャンピング土下座ができるのか不思議なんだけど。何気に魔道書もテーブルの上においてやがるし……。さすがパツチエさんだね。

「で、具体的に何をしてくれるの？」

「約束通り嘆息を消しに来たのと、フランのお世話をしなくていいようにしにきたわ。どう？うれしい？」

「……別にうれしくなんか　「じゃあ、別にしなくていいわね。」　ないことはないです。はい。」

いきなり不遜な態度をとるからだゾ

約束？図書館の管理人をやってもらう時にいつかやってあげるって言った適当な口約束……らしい。なんでらしい？とか聞かn(ry

「まあいいわ。じゃあ、まず嘆息治すけど、条件があるわ。いいかしら？」

「……条件によるわね」

「簡単よ。嘆息が治るのは私がこの幻想郷内にいるときだけ。」

「…まあいいわ。今までと比べたら全然いいほうよ。他にはあるの？」

「ええ、あと一つだけ。」

「なにかしら？」

本当はこれだけでもいいんだけどね。まあ、最初の条件はこの条件の為の保障よ保障。あつたほうが安心するしね。私のわがままだけどね。

「最後の条件は……レミリアとフランとこれからも仲よくするとよ。いいわね？」

「……わかったわ。」

なんだか温かい目で見られました！。あれ？私変なこと言ったかな？まあ、いいや。とにかく嘆息治してあげよう。……はい、治りました。だからそこ！チートチートって言わない！！言うならアホと呼びなさい。それなら許すわ。え？なんでそんなにアホにこだわるかって？知らないわよ！べ、別に突っ込んでほしいとかそんなことなんにも思っていないんだからね！！う、嘘じゃないわよ！？ほん
t(ry

「……どう？」

「……なんだか楽になったわね。成功よ。ありがとう……って言ったほうがいいのかしら？」

「いらないわ。条件を守ってくれさえすればね？」

私はそう言って笑う。やっぱり妹には仲よくしてくれるやつがいたほうが安心だからね。無理やりにも縛ってやるわ。私が幻想郷にいる間はたいてい自由にしてくれて構わないんだけどね。

「そう。じゃあ何も言わないわ。結界は解いておくからさっさと行きなさい。私は魔道書の解読に忙しいのよ。」

「クスッ。ええ、そうさせてもらっわ。」

パチエったらそんな顔を赤くしながらそんな態度とってたって可愛いだけよ？わかってるのかしら。

まあ、今はともかくフランのところに行きましょうか。多分そろそろ咲夜とレミリアも来るころだろうしね。

そう思いながら私は螺旋状になっている階段を降り、地下にあるフランの部屋まで行くのだった。

私とフランとレミリアと・・・

やあやあ、私は桜華だよ？知ってる？ごめんねえ、私最近物忘れひどくてさあ。え？なんでいつも口調が変わってるかって？私に会う口調ってどんなのかなあって自分探しをしているのだよ。……。ちよっと！なんでそこで無反応！？あ、こいつ駄目だ。もう救いようねえわゝとか思ってるんでしょ！？そうなんでしょ！？ふーんだ。いいもんねえ。フランたちで癒されてやるもんねえゝ

そんなこんなで螺旋階段を降り切りました！さあこの重そうな扉の向こう側には私の愛しい愛しいフランドールちゃんが待ってるってことだわさ！ムフフ。……。だゝかゝらゝ！そこで無反応とかマジで困るからやめてくんない！？あれだよ？マジシャンがそれなりに面白いことしたのに反応がなくて悲しくなるあれとおんなじ心理状況だよ！？

「フラン？入るわよ？」

ええ、表ではこの口調ですよ？だってこれで固定しちゃったもん。テヘツ……。ゴメンナサイ。ここで嘔吐物を出すの流石に勘弁してください。流石に私にもやりすぎた感があるからさ……。その、ごめんなさい。男だったっていう感覚がなくなっただよ。そういう風に幻想郷全土に認識させたときに私自信にもかかったみたいだから……。ジャイアンがこんな『テヘツ』とか言ったら怖いでしょ？今、あれが現実で起こってるって思ってもらったらわかるかな？…ね？気持ち悪いでしょ？

ま、まあとにかくそのことはおいておこう。やっぱり寝てるのかフランからの返答はない。さっき調べてみたんだけど私はフランの部屋には結構な頻度で来ているようだ。レミリアもここに来たがっているけど私がないときは来ていない。私が規制しているから。私がないときは能力が発動してしまう可能性があったから……らしい。今の私は神からチートをもらってるから完全にこの能力を操りきることができるから完全に狂気とかも封印できるし、能力に制限をつけることもできる。ってことでここに来たわけ。

ギィ・・・ボタン

「……すうすう……うん？……おねえしゃま？」

（か……かわいい！！かわいすぎる！！何これ！？何これ！？落ち着くのよ私！素数を数えるのよ！！あれ？素数ってなんだっけ！？1、2、3、4、5、6、7・・・ってこれは整数！！え？あれ？なにがどうなってるの？！）

きつとこのときの私は目がグルグルと回っていたに違いない。ていうかいつの間にか私、抱きついちゃってるんですけど……。

「ん……おねえ様あゝ（スリスリ）」

「カハッ！？」

しまった。ついつい吐血してしてしまった。仕方がないよね？あん

なに笑顔で『おねえ様あゝ』っていいながら頬に擦りよってくるのよ？想像できる？あ、やっぱり想像したら駄目よ。フランは私だけのものだもの（キリッ）

「あ！ちよつとフラン！！勝手に私のお姉さまに抱きついてるのよー！！」

「桜華様、ただいま戻りました。」

と、ここでレミリアと咲夜が部屋に入ってきた。こんな状況でなんだか恥ずかしいけどとにかくポーカ―フェイスを能力で保つ私。ん？ていうかレミリアはさつき何て言った？『私のお姉さま』？え？なにこの萌える展開。完全に予想外なんですけど……。

「フラン、とにかくおきなさい。レミリアもよく来たわね。」

「はゝい…ふわあゝ」

「当然です！お姉さまが呼ぶならどこへでも行きます！！」

キャラ崩壊パネエなこの世界。もしかして紅魔館組は私に依存しまくりだったりする？明日にはバカテスの世界に言って文月学園に入学するてはずなのになあ……だいじょうぶかな？

「ねえ、咲夜？明日から私が能力で人間に化けて外に行くってこ

と言ったかしら？」

とにかく物事を冷静に見れそうな咲夜に聞いてみる。すると、咲夜は眼を大きく見開いて驚いたような顔をする。

「き、聞いておりません！桜華様、いつお決めになったのですか！？」

うわー、あの咲夜がすっごい勢いでうるたえてる……。え？なに？やっぱり私ってこの紅魔館組に依存されてる？私の近くでレミリアとフランも私の言葉を聞いて固まってる。え？ちよつと神！？

『はい？呼びましたか？』

『ええ！呼びました！！文月に行くってなんで紅魔館組は知らないの！？』

『ああ、それはですね。私が面倒だったからです。』

『そんな理由かい！！』

『あ、安心してください。八雲ヤクモ 紫ムカリにはちゃんとOK貰ったってことになってますから』

『そ、そう。後は勝手に何とかしろってことね……』

『はい。頑張ってください。あ、紅魔館組だけじゃなくて幻想郷の大体のところの人たちはあなたに好意に近い感情を持っていますから。それでは失礼しますね。』

「ちやつと待てええええええ！！！！！」

依存は幻想郷全土に広がってましたとさ……。ハハ…ヤンデレいたらどうしよ……。

「ちよつと前よ。私も能力を完全に制御できるようになったし、応用もできるようになった。だからパチエの嘆息も治したし、今こうやってレミリアとフランの吸血鬼の弱点をなくしに来た。まあ、制限はつけさせてもらうけどね?」

「では私も付いていきます。私は元々、桜華様専属メイドですから」

咲夜がそう言うてくる。あれ？おかしいな……咲夜の眼が怖いよ？何て言ったらいいのかな？あれだ……レイプ眼？うん、そうそう。そんな感じ。これは見た感じ、咲夜って私に超依存してるよね。

「……わかったわ。ならレミリアとフランのことは美鈴にまかせておきましょう。私たち妖怪からしたら3年ぐらいすぐに終わることでだしね。」

「ちよつとお姉さま！私も行きます！！」

「ううゝ、私も行くゝ！」

レミリア、フランの順で私も行くと駄々をこねてくる。まあ、予想ぐらいはしてたけど……

「駄目よ。隙間妖怪との契約は連れていくなら最悪一人だけにしろって言われてるのよ。それに、貴方達には私がいない間の紅魔館を守ってほしいのよ。もちろん、美鈴やパチエ達にも頼むけど……。私の妹ならできるわよね？」

そう言いながら私は2人の頭をなでる。そうすると2人は気持ちよさそうに眼を細めるが、私の言葉に不満を感じたみたいで上目使いで頬を膨らませている。

私の言葉、つまり『私の妹ならできる』ってところだと思う。依存しているならこの言葉は一種の魔法のような言葉にかわる。つまり依存者は依存されているものに『貴方は私のゝなのだから出来て当然よね？』と言われると期待に答えようとして『はい！貴方様の為にならなんでも致します！』といった状況になるのだ。

私はそんな2人に苦笑いをし、2人の頭に手を置いた状態のままで2人の吸血鬼としての弱点を無くす。この能力は基本なんでもできるみたいだけど、こういう少し規模がでかいことは条件をつけなければならぬみたいなのだ。だから、それなりの条件を付けることにする。

「2人の吸血鬼の弱点はなくしたわ。でも、条件として私の幻想郷にいない間はいつもの通り、吸血鬼としての弱点はあるままよ。後、フランの狂気にも封印をさせてもらったわ。こっちの条件は特にないわ。」

そう言って私は2人をできるだけ優しくなでた後に部屋を出る。

私と隙間とプレゼントと・・・

「桜華様、何故あのような嘘を？」

フランとレミリアをフランの部屋に残し、自室へと向かう途中で咲夜が私に質問してきた。

嘘というのはフランの狂気を封印した事だろう。実際、気づかれないうちにいつも通りの言動、行動をしたつもりなのだけど……なぜか咲夜にはばれたみたいだ。だけどあえて嘘をつく。

「嘘？なんのことかしら？」

「妹様のことです」

即答する咲夜。

この世界の咲夜はレミリアのことをお嬢様。フランのことを妹様。私のことを桜華様と呼ぶみたいだ。ちなみに紅魔館組のだいたいはこの呼び方らしい。

「フラン？私には皆目見当もつかないわね。」

「誤魔化さないで欲しいですね。妹様ほどの狂気を押さえ込むことに代償を払わないはずがないじゃないですか。」

……気づいただけでなく確信しているらしい。

「そうね。でも嘘はついてないわよ？フランには代償がないもの。」

「やはりそうでしたか…代償にはなにを？」

少し悲痛な面もちをした咲夜だが、すぐに元の表情に戻って聞いている。

それに対してわたしはなんでもないかのように、明るい声音で返事する。

「死ぬ程痛い激痛」

そう言った瞬間咲夜の表情が凍った。起動に結構かかりそうな感じだから置いていくことにする。いや、決してこの後の咲夜の暴走を想像してしまったとか…そういうのじゃないんだからね！？

そんなこんなで早足で自室に戻る。部屋の扉についている特注品の鍵でしか開かない鍵でロックする。そして念のために私の妖力にか反応しないチェーンを操りロックする。

……さて……

「紫、居るんでしょう？出てきて欲しいのだけど？」

「あら？よくわかったわね。」

クパアという擬音と共に空間に両端がりボンでくくられた穴があらわれる。この穴を私や幻想郷に住まう人々は『隙間』と呼んでいる。そしてこの隙間を作り出した張本人こと『八雲 紫』が私の部屋に現れる。

「私だもの」

「そうね。あなただものね」

私の能力に不可能はない！！（キリッ

「まあ、そんなことはおいとくとして……同行者は咲夜になったわ。まあ、あなたなら視てたのでしょうけど……」

「ええ、視てたわ。あなたを。舐めるように。」

「ナニソレ、コワイ。」

いやいや、マジ怖いんだけど！？冷や汗ものどころじゃないからね、これ！

「紫？なにか怒ってる？」

「いいえ？別にいつ起こるかわからない、死ぬほど痛い激痛という名の発作をなんでもないかのように引き受けるあなたをおもいきり殴りたいなんて思っていないわよ？」

めっちゃめっちゃ思ってたっしやいますね。有難う御座いました。

知ってる？こういうことはスルーした方が身のためなんだよ？

「そう、良かったわね。で、入学に必要なものについてはどうなの？あ、向こうに行ったら私の能力とか使えないようにするからね？」

「必要なものは貴女の従者に渡しておいたわ。それと、能力についても了解よ。どうせ言ってもきかないのでしょう？」

「流石ユカリン、わかってるわね。それじゃ、私は寝るわね。」

そう言っって私は紫の返事を聞かずに布団の中に潜った。

） 次の日の朝 ）

おはようからこんばんわまであらゆることに精通する言葉。こんばんちわと言つ言葉を使つてみようと思つた桜華だよ

そろそろ咲夜が呼びにくる頃合いだから部屋にかけてあつたロックを全て外す。すると同時にドアが開く。

「おはようございます、桜華様。咲夜さんがそろそろ準備できるそうですので迎えにきました。」

入ってきたのは咲夜ではなく紅魔館の門番をしている美鈴だった。

「珍しいわね。美鈴が呼びに来るなんて」

いつもなら咲夜が起こしに来るのに、今日に限つて美鈴だ。少々びっくりするぐらい普通だ。

「桜華様に渡したいものがあつたので頼んで変わって貰ったんですよ」

「渡したいもの？」

美鈴が私にプレゼントだなんて…いつもは門番として私に尽くしてくれてるけど、こうして美鈴にプレゼントを貰うのは実は初めてだったりする。私からプレゼントしたことはあつたけどね。

「これですよ。」

美鈴から渡されたのは星型の髪留め。正直いうとかなり嬉しい。

「美鈴、ありがとう。宝物にするわね」

こういうことには満面の笑みでお礼をしてあげるのが筋つてもものらしい。神からの情報だ。

「い、いえ／＼／」

美鈴がすっごい照れてる。はっきり言おう。可愛いです。はい。

「そうだ、美鈴。この髪留めを私につけてくれないかしら？」

私がそう言つと顔をこの紅魔館のように真っ赤にしながら頷いてくれた。動きがカチコチで、危なっかしいけどこれはこれで良い。

「ど、どうでしょうか？」

美鈴が私に髪留めを付けた後に手鏡を持ってくる。金髪と青紫色のメッシュで染まった髪に星が付き、さらにこの容姿に幻想的なにかがっているような気がする。

「上出来よ。流石だわ、美鈴。」

「あ、ありがとうございます！」

また、そんなに慌てて……襲われないのかしら……？

……はっ！？男の時の感じがまだ残ってたみたいだ…危ない危ない…リアルレスを体験する所だったわよ……

「あ、そうだ。咲夜さんに呼んできてって言われてたんだっ…さあ、桜華様。食堂に行きましょう」

「ええ、そうね。美鈴、エスコートして下さい？」

「はい。よろこんで」

そう言って美鈴は私の手を取り、食堂へとエスコートして行った。

私と邂逅とプレゼント・・・

「おはようございます、桜華様。そして、中国は死になさい。」

「ちよっ!？」

どうも、美鈴のエスコートによつて食堂に来た桜華だよ！

最初は咲夜の罵倒から始まるよ！

幸先いいね！

「おはよう咲夜。いじるのは良いのだけど、やりすぎは駄目よ？やるなら私の目の届かないところでやってちょうだい」

「畏まりました。（キリッ）」

「桜華様！？そこは助ける所では！？ていうか咲夜さんも『畏まりました（キリッ』じゃありませんよ…って！？え？私の服の襟なんか掴んでどこへ？いやいや、そんな小声で『中国…桜華様と手をつなぐなんて…妬ましい』とかブツブツ言われても怖いだけですって!!…ちよっ!やめ……アッ」

…私はなにも見てないよ?いやー、それにしても咲夜と美鈴は仲がイイナー。

「お姉様、ちょっと食事の前にお腹空かしてくるわね。」

「あ、お姉様手伝うよ。」

そう言つて、部屋を出て行く妹二人。そういえばレミリアが私のことを『お姉様』。フランが私のことを『お姉ちゃん』。レミリアのことを『お姉様』って呼ぶみたいだ。

それにしてもいい笑顔だったな。心も身体も空気も氷河期に突入したみたいだよ

「それじゃあ先に食べましょうか。」

「ええ、そうね。」

「はい！」

私の『いただきます』と言う声の後に、部屋に残ったパチエとこあが続いて『いただきます』と言う。木霊ですか？いいえ、いつでも。

「それにしてもあれね。」

「ええ、そうね。」

「そうですねー。」

どうやら皆さん思っていることは同じのようだ。

「「美鈴みず、五月蠅い（です）。「」」

美鈴……南無。

「あ、そうだったわ。」

なにかを思い出したように自身の服についているポケットに手を突っ込むパチエ。

「はい、コレ。」

そう言っただけで渡してきたのは月の形をかたどったネクタイピンだった。

「私とこあからのプレゼントよ。それには転移魔術がかけてあつてね。そのネクタイピンに両手をかざして行きたい場所に強く願うと転移できるって品物よ。ただ、明確なイメージが必要だから行つたことがないところや、曖昧なイメージだったら転移できないからね。」

「へえ……ありがとう」

「べ、別に礼なんていらないわよ」

「えへへ」

私がお礼を言うのと照れてるのか、顔を背けながら言うパチエと、完全に照れてますよオーラをだしながら笑うこあがとてもかわいかったとだけいっておこう。

それにしても、パチエって嘆息が治ったからか一気に喋るようになったなあ。うん、良きかな良きかな。

～食事終了～

「咲夜、準備はいいかしら？」

「はい。」

その後、私達が食べ終わる頃になってようやく咲夜とレミリア、フ

ランが帰ってきた。皆さんの顔と手にトマトケチャップがべつたりとついていたのはなんだろう？ なにか料理でもしてたのかな？ まあ、そんな些細なことはおいとして、私と咲夜はたった今、準備を終えた所だ。

え？ なんの準備かつて？

文月学園へ行く準備だよ。今日から私と咲夜は文月学園の第一学年として入学するから、その準備。ま、だいたい咲夜が早朝に終わらせてみたいだから確認だけしたのよ。

ちなみに此処は私の部屋だよ。基本私以外入れないようにしているからね、安全なのよ。フランとかレミリアとかがついてこれないように私の妖力にしか反応しない鎖があるこの部屋は。

「じゃあ、行きましようか。」

「はい。」

そう言つて私は前方の空間を何故か紫から渡された、紫とお揃いの扇子で縦になぞるように下ろす。

するとそこには幾つもの目が此方を見てくるものがクパアという擬音と共に現れた。所望『隙間』がひらいた。

何故隙間が開くのかとか聞かないでね。良い？ 私の能力に不可能はないのよ。

そして、私と咲夜はその隙間の中に迷いなく入っていった。

） 路地裏 （

隙間からでるとそこは路地裏でしたとさ。こういう時はユカリンから貰ったコレの出番なり！

「ちぎずぎぎ！」

チーズじゃないよ？地図だよ？ただ単にドラえもん風に言ってみたかっただけだからね。

あ、咲夜は気にしないで。ただ忠誠心を鼻から垂れ流してるだけだから。うん。『ああ、なんて可愛らしいお声で…ふがふが』とか聞こえないから。うん、キコエナイ。

「え」と、なにに？『この路地裏にそれなりに立派な家があります。それが桜華様達の家です。隙間を開いたりするときはその家の中をお願いします。紫様が境界を操って二人以外にそこは行き止まりにしか見えないようにしているのであしからず。』…か。立派

ねえ……」

ていうか、地図とかまで藍にさせてるのね。ああ、藍っていうのは『八雲ヤクモ 藍ラン』っていう九尾狐の妖獣よ。まあ、藍についてはその内説明することにするわ。

それにしてもこんな路地裏に立派な家なんてあるのかしら。そう思い、周りを見渡す。

右 壁

左 壁

上 青空

下 右と左の壁に挟まれた直径1メートル程度の幅の道

後 忠誠心を垂れ流している咲夜&人々が行き交う商店街

前 永遠邸のような建造物

……あつたね。ていうかコレでそれなりって……永遠邸の奴らが泣いてそうね。ほとんど隙間開くだけの家なのにこんなに広くして意味はあるのだろうか……

ていうか明らかにこんなにでかい建物がはいるような所ないよね？
ああ、もしかして紫がしたのかな？空間の境界でも弄くったのかな？

……やめよう。考えてもわからないし。

「咲夜、これからあの家の中以外で能力を使うことを禁止する。いいわね？」

「畏まりました。」

咲夜、まず鼻血を拭きましようか。

それから咲夜が完全に復活するまで待つて、ゆっくりと文月学園へと歩いていくことにした。

いや、したかった。

「きゃっ!？」

路地裏からだと、私は誰かとぶつかって尻餅をついてしまった。ついてない。まだこっちについたばかりなのに人とぶつかるなんてそう思っていると、多分ぶつかった相手であろう女子が話しかけてきた。

「Das tut mir leid. Bist du okay? (す、すみません。大丈夫ですか?)」

うん?ドイツ語?

疑問に思い、ぶつかった女子に目を向ける。そこには知っている顔があった。

『島田^{シマダ} 美波^{ミナミ}』。バカとテストと召喚獣の原作メンバーの一人だ。

うん。さっきのついてない宣言は取り消すわ。凄くついてる。初めてから原作メンバーと出会うなんて。

とにかく、相手に合わせてドイツ語で話してあげる。

「Mach dir keine Sorgen. Okay, was Frau? (大丈夫よ。貴女こそ大丈夫かしら?)」

「Usw., in Deutsch!? (ど、ドイツ語!?)」

どうやら美波は驚いているらしい。当たり前だ。こんな所で聞くとは少しも思っただろうから。

「Ach, ich war noch vorstellen.
Ich bin eine Kirsche Blume Na

men . Auf diese Weise ist Sakuya . Ich bin die Magd von mir . (あ、自己紹介がまだだったわね。私の名前は桜華よ。で、こっちが咲夜。私のメイドをしてるわ。)

私が咲夜のことと紹介すると、咲夜はメイド服のスカートをつまんで軽くお辞儀した。話にはついていけるのかが微妙だけど、多分ついていけるみたいだ。

「Ist es Ihnen ? Shimada ist Mianami . (は、初めまして。島田 美波です。)」

美波はこの急な展開になんとかついてこれてるみたいだ。

「Es scheint , wie Schulerinnen und Schuler auch 文月 Dame . . . Ich sehe die neuen Studenten ? (見たところ貴女も文月学園の生徒みたいだけど……新生 ?)」

「『Zu ? So Dame sein ? (『も ? じゃあ貴女も ?)』」

「Ja . Es ist auch nicht nur mir hier Sakuya . Zur Schule sowieso . Ich wurde zu spat kommen . (ええ。私だけじゃなくこっちの咲夜もね。とにかく学校へ行きまし

よう。遅刻してしまうわ。」

「Huh? - Ja. . . . Ich bin kein
Madchen einheitslich auf eine P
erson . . . Ich bin in der Regel
diese, Dad? (え? うん。その人制服じゃなく
てメイド服だけど……これが普通なのよね、お父さん。)」

そんなこんなで私は付き人Aこと島田 美波を手にいれた。とにかく入学式当日から遅刻なんてバカな真似はしたくないので少し急ごうと思います。

Come on Come On Come On Come O
n Come On Come on!!!!!!!!!!!! (行く
ぜ行くぜ行くぜ行くぜ行くぜ!!!!!!!!!!!!!!)
()

私と新生と邂逅と・・・

「Das klingt gut, wenn ich kon
nte mit der Klasse werden sowi
eso (どうせなら一緒にクラスになれば良いわね)」

「Ja. Warte, das ist nicht mei
ne Klassen zusammen, ich werde
... Ich weis nicht, was (そうね。て
いうか、一緒にクラスじゃなきゃ私はどうしたらいいのかわからな
くなるからね...)」

私と美波は文月学園につくまでに結構仲が良くなった。なんだから、
色々な話をしてたら仲良くなったって言った方が良いのかな？

私がロンドンから来た日本人とイギリス人のハーフだ(嘘)とか、
大体二十ヶ国語ぐらいを喋れるし書ける(本当)とか、妹が超可愛
い(話してない)とか...

「Nun, zu mir kommen, wenn es
Probleme. Ich werde so viel wi
e möglich zu helfen. (まあ、困ったことが
あったら私の所へ来なさい。できる限り助けてあげるわ。)」

そう言った時の美波の目は私を神様かなにかと間違えてるんじゃないのかと思えるほど輝いていた。

く、この私が人間ごときにやられるなんて……外界の人間は化け物か……！？

「Oh, Hua Kirsche, D h a t t e e i n e K l a s s e T i s c h ! (あ、桜華！クラス表があつたわよ！！)」

「S i e t a t d i e s (本当みたいね)」

「W a r u m n i c h t ? I s t d a s n i c h t b r a u c h e n , z u l u g e n ! (当たり前でしょ！嘘をつく必要もないじゃない！！)」

「Oh? I c h g l a u b e , i c h w a r u n h o f f l i c h . S a k u y a ' s g e w e s e n u n s e r e n A n t e i l e r h a l t e n h a b e n . I c h e r l a u b e d i e V e r w e n d u n g d i e s e r F a h i g k e i t . (あら？それは失礼したわ。咲夜、私達の分も見えてきて頂戴。今回は能力の使用を許すわ。)」

「畏まりました。」

咲夜…そこはドイツ語で返すところよ。全く……ノリが悪いんだから。まあ、私の命令に忠実で気が利くメイドなんて咲夜だけなんだし、少しくらいなら許してあげないこともないのだけでも……

それにしても、咲夜の私への依存率とかやばいわよね。そろそろヤンデレにならないか怖いわ……。あれ？手遅れとか聞こえたんだけど……気のせいよね。

「桜華様。どうやら私達全員一年B組のようです。」

「そう、よくやったわ咲夜。Das ganze Jahr ich RASHII B.（全員一年B組らしいわ。）」

「Wirklich? Haben Sie es! Jetzt fühle ich mich jetzt besser!（本当！？やった！これで気が楽になったわ！！）」

ほら、そこ！美波を微笑ましく見ないの！！確かにこの安堵仕切った顔とか葉月ちゃんに似てるなあとか思ったりするけど……それを顔にしたらダメよ？ここはポーカーフェイスよ。

「ああ……必至に隠そうとしてる桜華様……なんて可愛らしい……」

……私はなにも聞いてない！見てない！！そうよ。私を見た後に体をくねらせて変なことを口走る咲夜なんか見てないわ！！

「すまない。一年B組の場所ってわかるか？」

「ん？」

私の後ろで嬉しがっている女子と悶えている従者がいるなか、一人の男子が私に話しかけてきた。

はつきりいつて驚いた。だって、こんな変人が二人もいる中、話しかけてくるなんて……. どんだけ物好きなのかしら…….

とか思っただけど、周りを見渡してやっとな理由がわかった。どうやら、いつの間にか時間が過ぎていたようで、私達の周りにはこの男子と私達しかいないみたいだった。

「あら？ 貴方、一年B組なの？ だったら丁度良いわ。私達も一年B組だから、一緒に行きましょう。大丈夫よ、この二人は元々変人なただけだから」

「全然大丈夫じゃないんだが！？」

流石ね。その腕（突っ込み）なら世界を狙えるわ。

え？ なんでそんなに乗り気なのかって？ それはね、目の前にいる男子生徒があつた。坂本 雄二ユウジだからよ。そう、あの野性味溢れる何気に凄く優しくてカッコいい雄二くんよ。

「大丈夫よ。だってここ、文月学園よ？ きっとコレと同等かコレ

以上がいるに違いないわ。」

「何気に友人をコレ扱いか……気持ちにはわからんでもねえが……
ていうか文月学園だからって理由で納得できる俺って……」

「さあさあ、愚痴つてると遅刻するわよ。Sakuya, Minami. Ich bin schnell gehen. Einweiteres gutes aber sp?tf?r Sie... (咲夜、美波。さつさと行くわよ。遅刻してもいいなら別だけど……)」

「Okay. (わかったわ。)」

「畏まりました。」

そんなこんなで適当にLet's Go!!

「そういえば、さつきから話してる言葉は何なんだ?」

「ドイツ語よ。こっちの美波がドイツからの帰国子女なのよ。で、
たまたま道端で出会った私がドイツ語を話せたから一緒に登校してきたってわけ。」

そんなこんなで今、私は1年B組の教室内にいます。ええ、入って

みてすごく吃驚しました。Fクラスにいた須川君とかFクラス主要メンバーがいたりしたからだ。

まあ、雄二はなんだかはぐれ者って感じがびんびんしてるし、誰も話しかけてこない。だからと言っては何だけど、朝からの付き合いがある私たちが話し相手になっている訳。みた感じ必要なさそうだけどね……。

「こっちからも質問いいかしら？」

「ああ。俺に答えられることならな。」

お許しが出たので私は雄二にさっきから気になっていたことを聞いてみることにした。

「あれ……。なんでセーラー服なんかきてるのかしら？」

「知らん。」

一言……。明久がさっき遅刻ギリギリで教室に入ってきた。もちろん原作通りに文月学園の制服を着ずに女子用のセーラー服を着た明久が。

私と紹介とフルートと・・・

やあやあ、また会ったね。知つとる人もいると思うけど私の名前はジャイアン……じゃなくて、桜華・S・T・天月だよ。いきなり性転換とか転生をされた、哀れな人間だった者だよ。

そんな哀れな人間だった私は今、吸血鬼になつて人間が通っている学校に入つたよ。しかも文月学園だよ？まるで神様が私に原作プレイクして欲しいと言つてるものだよね？

まあ、そんな私は今、自己紹介をしているよ。

スカーレットドレイ

「私の名前は桜華・S・T・天月。ロンドンから来たイギリス人と日本人のハーフよ。好きな者は家族。嫌いな者は他人に迷惑をかけていることにも気づかない屑よ。よろしくするかは貴方達に任せらるわ。」

「私は十六夜 咲夜と申します。桜華様のメイドをさせて頂いております。制服ではなくメイド服を着ておりますが、学園からは許可を得ておりますのであしからず。後、桜華様に何かしようなら容赦はしません。私も桜華様の物なので勝手に写真に収めたりは遠慮致します。」

私が自己紹介すると、私の次に自己紹介をするはずの咲夜がいきな

り立ち上がり自己紹介を開始する。

これには流石の桜華さんもビックリだ。まあ、ムツツリー二が私を撮ろうとしていたからみたいだけど……いきなり立ち上がって自己紹介をするのはいただけないわね。

「咲夜、ほどほどにしておきなさい。写真は破ったらいいわ。もし、撮影が続くようならカメラを破壊しなさい。自業自得以外のなものでもないのだから文句はないはずよ。」

「……畏まりました。写真は私が全て貰い受けて、カメラを壊す程度にとどめておきます。」

……なに言っちゃってるのこの娘。正々堂々と写真をパクリとか暴露しちやってるわよ。まあ、盗撮写真を被写体の使用人が貰い受けるだけだから……問題……ないのか？

それにさっき言ったように他人に迷惑をかけているのに気づかない屑は嫌いなので、可哀想とかはとくに思わないから別にどうでもいい。そう、例えばムツツリー二が震えていようとも。

だいたいそんな事をして幻想郷の奴らが黙っているはずがないしね。私、何故か結構好かれてるから。

「西村教諭、自己紹介を続けて貰って結構です。貴重な時間を削ってしまい、申し訳御座いませんでした。」

「気にするな。さ、次の奴出てこい！」

ここでの原作との相違点は担任が無名の先生ではなく、西村教諭に変わっている。

Fクラスルートがたった…とか？

まさか、そんな事はないよね。Fクラスとかマジ勘弁だよ？

「^{スガワ}須川 ^{リョウ}亮です。好きな物は……」

須川 亮。FクラスのFFF団をまとめあげる男。人一倍嫉妬心が強いが、FFF団内でもかなりの常識人に入る。

つまり、Fクラスの人間だ。

というか、今辺りを見回してみたけど……Fクラスの連中ばかりじゃない！？

神のやつ…もしかして、私をFクラスに入れようとか考えてるんじゃない？

やめてほしいわ。私が嫌いな人種ばかりじゃない。私がFクラスになったら紫にでも頼んで学園長を脅して……お話して貰おう。

おっ？次は美波みたいね。間違ってたらフォローしてあげますかぁ。

「シマダ ミナミ です。よろしくお願いします。」

黒板に漢字です自分の名前を書いた後に、片言で自己紹介する美波。
って、漢字間違えてるじゃない……

「Minami, wurde ich Kanji verw
echselt. (美波、漢字間違えてるわよ。)」

「Huh? (えっ?)」

私が美波の自己紹介に割り込み、漢字の間違いを指摘する。

ちなみに間違えていたのは『島田美波』の『波』の部分を『彼』に
していた。

私の指摘を受けた美波は、慌ててスカートに入れていた自分の名前
を漢字で書いた紙を取り出して見比べる。

そして、間違いに気づいて慌てて字を消して『Minami Sh
imada』と書き直した。

「Cherry Blume. Vielen Dank, G
ott sei Dank. (桜華。ありがとう、助かったわ。)」

美波は私に笑顔で返す。

私もそんな美波に向かって、笑顔で返す。木霊でしょうか、いいえ、誰でm（ry

その後に西村教諭が美波がドイツからの帰国子女ということを伝え、後に、日本語に慣れていない美波から一言――

「よろしくお願いします。」

――とだけ伝えた後に席に戻った。

さて、美波の次は確か雄二だったわね。まあ、やる気なさそうだけど……

「神無月中学出身、坂本雄二だ。」

それだけ言って座った雄二。想像通りの展開に流石の桜華さんもビツクリ仰天だよ、全く。

「アイツ、神無月中の……」

「悪鬼羅刹って噂の……」

「かなりやるヤツらしいぞ……」

噂が広まっているみたいね……。まあ、悪い方だけど。人間って馬鹿ね。噂に左右されるなんて……。前まで人間だった私が言う台詞でもないけど。

だんだん思考まで妖怪化してきたみたいね。ま、今となったらその方が良いけど。

「……フン」

馬鹿にしてるか、興味がなか迷うな。此処まで聞いてみると、原作通りみたいだし寝ても大丈夫かな？ やっぱ、夜行性だからか眠気が凄いわけよ……

ってなわけでオヤスミッ

私と一年後と原作開始と・・・

はい、どうも。みんなの味方、桜花さんだよー。

あのね、報告があるんだ！なんと、今日から新学年なのです！

えっ？一気に飛びすぎだ？いやね、ちょっと大人の都合ってものもあってね？気にしちゃ負けだよ（キラッ

あ、ごめんなさい。作者が久々に投稿したからテンションあがって……メタ発言？ナニソレ、オイシイノ？

「桜花様、桜が綺麗ですね。」

「まあね。でも幻想郷には劣るわよ。なんていったって『幻想』の集まる場所なのだから……」

そう。咲夜との会話からわかった方もいるかもしれないが、今、私は登下校で使用する桜並木を歩いている。ま、一年間通った道だから情緒もなにもあったもんじゃないけどね。それに、昔の方が空気も何もかもが綺麗だったし。

「そうですね。西村教諭が見えてきました。」

「朝から暑いわね。ま、あの人も仕事だから仕方がないか……」

それにしても、本当に暑いわね。西村教諭はなんであんなに見てるだけで暑苦しくなるのかしら？もしかして『主に相手を暑苦しくさせる程度の能力』でも持つてるんじゃないのかしら？

……知らないわね。なんでそんな能力を持っているのかしら。ていうか、筋肉マッチョのオッサンども全員この能力持つてるってことになるんじゃないかしら？

てことは……ボディービルダーが集まってポーズを決めているところなんか想像すると……うん。死ねるわね。

「西村教諭、おはようございます。」

「西村・Ｔ（鉄人）・宗一教諭、久しぶりですね。」

「おはよう、十六夜。それで、天月はなんで俺をハーフ風にしたんだ？それにさりげなく鉄人呼ばわりするんじゃない。」

「鉄人がだめなら哲人なんてどうでしょう？」

「何が変わったんだ？」

あつ、そうか。実際小説で読むと簡単にわかるけど、普通に話して

いるだけだから勘でくらいしかわかるわけないか。

いやはや、さすが哲人。いいことを教えてくれる。よっ、哲人！これからは愛称で『てっちゃん』で呼んであげよう。」

「呼ばんでいいっ！」

「……人の心と呼ぶなんてプライバシーの侵害です。訴えますよてっちゃん。」

「貴様が勝手に途中で言ったんだろう？それと、てっちゃんって呼ぶな。」

「……てっちゃん。さっさと仕事してください。ほら、私達に渡すものがあるでしょう？」

「……天月、そんなに補修室にいききたいのか？まア……いい。ほら、これがお前たちのクラスだ。」

そういつてそっぽむくー君ー……。……違った。間違つて世界で一番のお姫様な曲を歌いそうになったよ。ま、そういつて私たちに封筒を渡してくるてっちゃんこと西村教諭。

私たちはその封筒を受け取って速効開ける。中には大きく『Aクラス』と書かれていた。

「天月、お前はAクラスの次席だ。主席は霧島だから、しっかり

とサポートしてやれ。」

「わかりました。では、これで失礼します。」

え？西村教諭に対してはなんでそんなに礼儀正しいんだって？先生の鏡である西村教諭に礼儀を持って接するのは当たり前前の行為でしよう？

ま、紅魔館の主であるのだから礼儀くらいはわかってないとやっていけないからね。教諭達には基本的にこうした態度で行こうと思ってるわよ。

「咲夜、HRまであと何分かしら？」

「後十分程度は余裕があります。つきましたら紅茶をおいれたいかもしれませんか？」

「お願いするわ。さて、咲夜。命令よ。『私が認めた相手以外の言うことを聞くな。』」

「『Yes, Master.』桜華様からもらったこの名にかけて……」

そんなやりとりをしながら私と咲夜は学年最高クラスであるAクラスへとゆっくりと歩いていく。

ついた後は自己紹介で自習かな？原作ブレイクはしたほうがいいかしら？

私と邂逅とAクラスと・・・

やあ、みんな！自由と愛の吸血鬼こと桜華ちゃんだぞ

やっぱりこの教師陣は以上と理解したとこだよ。

いやね？今、教室にいたんだけど……バカでかいのよ。高校生の教室じゃないよね。たとえあったとしても超金持ち校じゃないとこんな設備はありえないね。

まあ、下のクラスからしたら学習意欲がわくだろうね。こんなクラスで暮らしたいと思うのが普通だろうし。

Aクラスにも効果はありそうだけどなあ……この設備に慣れたら他の設備なんかじゃ物足りなくなるだろうし……

「桜花様、紅茶が入りました。」

「そつ、ありがとう咲夜。」

何故だか知らないけど、私と咲夜が一番のりだった。一人それぞれに配布されているのだから勝手に使ってもいいだろうということで勝手に紅茶を飲ませていただいている。

「咲夜、てっちゃんから貰った生徒表を頂戴。」

「かしこまりました。」

そういつてAクラスの生徒表を渡す咲夜。実は西村教諭からAクラス
の副代表だからという理由で生徒表を渡されたのだ。

覚えておいて損はないだろう。

ここで、私は能力を使うことにする。『幻想を司る程度の能力』で
作り出した能力の『完成^{ジ・エンド}』。めだかボックスという厨二設定満載の
漫画の生徒会長が使う『異常^{アブノーマル}』だ。実際問題『完全記憶能力』と『
完全理解能力』を作り出して、応用させてやったら一発なんだけど
ね。

ま、実は授業中とか普通に使ってるんだけどね。え？咲夜には使っ
たっていつてるのになんで自分だけ使ってるんだって？

そんなの私だからに決まってるじゃない。

これこそジャイアニズム。さすが昔はジャイアンと呼ばれた男だぜ
い。前世の話だし、今は女だけだけどね

「咲夜、もういいわ。覚えれたから。」

「かしこまりました。紅茶のお代わりはいかがなさいますか？」

「お願いするわ。」

といった感じで咲夜と2人でゆっくりとティータイムを楽しんでいたんだけど、そんななか、私たちに近づいてくる勇者がいた。

うん。勇者。出す気はないんだけど、なんだか咲夜が百合百合しい雰囲気をもしだしているから近づくななんて滅多にないんだけどね。

近づいてくるのは私達がそんな関係じゃないと知っている人間か、ただの空気を読めない馬鹿ぐらいだろう。

まあ、この人物はその両方でもないみたいだけどね。

「……………あなたが天月？」

『霧島 翔子』^{キリシマ ショウコ}。学年主席の天才娘。坂本雄二とは幼馴染で、坂本雄二に恋愛感情を抱いている。普段寡黙な性格だが、雄二が絡んできるとなにかとデンジャラスな性格に変わってしまうという、変な性癖の持ち主。まあ、変わるときはだいたい雄二の近くに女子がいる場合のときだけ。

「ええ。初めまして霧島。それとも坂本がいいかしら？」

私がそういうと、霧島さんは少し驚いた表情を見せてから、嬉しそうに笑った。

「……まだ霧島でいい。もうすぐ坂本になる予定だから待ってて。」

「わかったわ。」

多分ここにきたのは私が副代表だからだろう。一応挨拶をってところかな？

一応代表として、副代表の人柄とか見とかないともしもの時にまかせられないからね。

「そういえば霧島はクラスの人たちの名前は覚えた？」

「……一応は覚えた。」

「そう。もし忘れてたりしたら言ってね。一応成績とか特徴とかは頭の中に詰め込んだから。」

「わかった。」

そういうええさ？

原作ブレイクする？ちよつとかえるぐらいはするかもだけど……。どうしよっかな……。もうちよつとキャラが変になっている原作キャラもいるしね。

大丈夫か。そんなときは修正力に任せよう。

ビバ
修正力！！

私と原作開始と試召戦争・・・

やあ、皆の味方の桜華・S・T・天月だよっ！！

え？なんでフルネームかって？いや、そろそろ皆私の名前忘れてるんじゃないかっておもってね。はっきり言ってみな？忘れてただろ？うん？忘れてない？

嘘だっ！！！！！！

ネタ？そうですが何か？

まあ、そんなことは適当にそこらにある墓場にポイツして、本題に戻りましょうか。

やっと原作だよ。今さっき自己紹介が終わって、DクラスとFクラスの試召戦争が始まったところだよ。

それで他のクラスは自習。もちろんこのAクラスも同じだ。しかし、私は自分にあてがわれたパソコンを立ち上げて、学園の監視カメラにばれない程度にハッキングをして試召戦争の様子を見ている。犯罪？知らないよ。私達幻想郷に住まうものとしては常識なんてもの

は捨て去るものだからね。まあ気にするな（キリッ

「……桜華、何してるの？」

そんななか、我々が代表である霧島翔子が話しかけてきた。あの後、話し合っていたら結構気があったので名前で呼び合うことにしている。雄二の話をすると簡単だった。私に雄二をどうこうするつもりもないとわかれるとさらに好感度がアップしたのは言うまでもない

「今行われている試召戦争の様子を見ているのよ。なぜ見れてい
るのかは企業秘密。企業じゃないとかいう突っ込みおいらないわ。」

「……そう。私も見ていい？」

「ええ。」

霧島翔子が仲間になった

なにかのテロップが流れたような気がするけど気にしない。気にしたら負けのような気がするから。異論認めない。

「へえ、代表達面白いことしてるね。わたしも入れてよ。」

「ていうかそれって犯罪じゃ……」

などとほざいても……などと言って私たちの会話に入ってきたのは『
工藤 愛子』と『木下 優子』の2人だ。

工藤愛子は二年の保健体育に限って第二位の実力者だ。本人は実技が得意のどと言っているが、実際はただの生娘である。ま、私が勝手にそう思っているだけだね。

木下優子。彼女は優等生を演じているただのBL好きの腐女子。彼の弟も演劇のホープなので、演じることに關しては結構すごかったりする。

「あら？ いいわよ。ちなみにこれは犯罪じゃないわ。犯罪だとしてももみ消せる自信はあるから大丈夫よ。」

「それ、大丈夫じゃないわよ……？」

「まあ、いいわ。それにどうやらFクラスには『姫路 瑞希』がいるようだね。」

「え？ そうなの？」

「ええ、そのようよ。それに……どうやら最終的な目標はAクラスみたいね。」

『！？』

私がそういうとこの話を聞いていた生徒全員が驚いた顔をした。そして、私に注目が集まる。皆の表情には「正気か？」とか「なにを馬鹿なことを……」などといった色々な表情になっているのが見える。

「このDクラスとの戦いは多分Fクラスの人たちに召喚獣の扱いを慣れさせるため。姫路がいるからEクラスは相手にならないからDクラスを狙ったんだとおもう。そして、この試召戦争が終わったらBクラスと戦うと思う。Dクラスを狙ったのはBクラスの室外機がDクラスにあるからもあるだろうし……。そしてこの二つのクラスに勝ったとしたらD、B両方に交渉で戦争が終わったことにして、Aクラスを攻め込んでくるでしょうね。」

「でもそんなこととしてもFクラスはAクラスに勝てないわよ？」

「そう。そこで多分こういうでしょうね。『俺達は代表戦を申し込む。』ってね。これで勝てる方法があるんでしょう。Fクラスの代表とAクラスの代表は幼馴染だし、こっちの代表のことを色々知ってるんだろうから簡単に作戦は立てられると思うわ。馬鹿見たな話だけど……この様子を見た限りだと多分間違いないわ。」

「……私も桜華の言っている通りだと思う。雄二ならやりかねない。」

「私も桜華ちゃんと一緒かなあ。多分そのままの勢いでここまで登ってくると思うよ。Bクラスの代表は根本君らしいから苦戦はするだろうけど、代表の幼馴染なら上がってくるでしょ。」

……いや、それはどういう理屈の愛子。代表の幼馴染だからと言って過大評価はよくないよ？

まあ、皆がなるほど、なみtainな顔しやがるから突っ込めないんだけど……。私が間違ってるの？私だけがアウエーなの？

き、気にしたら負けね。

「だから優子、対策考えておいて。五対五にするなりしてできるだけこつちに有利な状況作り出して。いざというときは咲夜を付けるわ。」

「わ、わかったわ。考えておく。十六夜さんもフォローをよろしくね。」

「かしこまりました。」

さあ、これで原作を変える地盤は少しは整ったかな？

これからが本番だ。せっかく変えたのに修正力で元に戻されないように頑張らないとね。

私と原作破壊と試験召喚戦争・・・（前書き）

原作ブレイク入ります。

私と原作破壊と試験召喚戦争・・・

） 雄二 side ）

とうとうBクラスに勝った。Bクラス代表が”あの”根本だったときは流石に少し警戒してしまったのは当たり前だと思う。

まあ、一応弱味は握ったことだしこれからは多分大丈夫だろう。

しかし、一番の問題はこれからだ。Aクラスにはあいつらがいるからな……。はつきり言ってしまうと不安しかない。

此方は姫路、ムツツリー二を中心に計画を立てなければならないのに対し、Aクラスは全員が全員好成績。つまり、姫路、ムツツリーニクラスがうじゃうじゃいる。

それに、今考えている計画が失敗したら、一番の問題である、桜華・S・T・天月とその従者、十六夜咲夜を一気に相手しなければならなくなる。

はつきりいつて翔子を相手するより厄介だ。なんせ『テストの残り時間数十分で』学年次席と参席の座についているのだから。

しかも翔子によると、それが翔子の点数の10点差以内だとかいいやがる。ふざけていると思えない。

まあ、しかし……頑張るしか……ないんだよな……。

……いや、詰んでるだろ。

〈 桜華 side 〉

ヤッホーッ！いやに女性にモテモテな桜華さんだよ（笑）

いや、『（笑）』じゃねえよ……。なんで女性にモテモテなの、私……。結構自身なくすよ？

しかもあれでしょ？優子の弟なんか男子にモテモテなんでしょ？

ははっ、笑っちゃうよねー。笑っちゃいたいなー。でも笑えない。
何故なら同士だから。

涙がでちゃう……だって吸血鬼だもん

「なに泣いてるのよ副代表……。そろそろなんでしょ？」

「気にしないで、コレは汗だから……。まあ、そうよ。はつきり
言っただけで大丈夫だと思うけど……。」

何故だか知らないけど交渉に出ることになったみたいなんだ。

らんらんー

いやね？優子が『私、副代表、違う。お前、出る。』とか言うから
代わることになったんだ。面倒なんだなあー、コレが。

ま、一応クラスの皆さんにはこの交渉によって出る結果がどうなっ
ても良いというお言葉を貰ったからいいけどね。

あ、ちなみに女装男児根本ちゃんは来たよ？要件はわかってたから
さっさと帰って貰ったけどね。

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

とうとう雄二達が来た。まったく……待ちくたびれたよ。

まあ、狙いはわかってるからね。大胆に行ってみようかと思う。

「雄二、そんな都合が良い条件が通ると本当に思っているのかしら？」

「……そうだな。（くそっ、翔子や木下姉なら簡単に行くんだろ
うが……よりによってこいつが交渉にでるとはな）」

「私にそんな策は通用しないことはあなただってよく知っている
でしょう？どうせ、代表同士の一騎打ちを拒否しようとする動作を
此方が見せたら『Dクラス、Bクラスが攻め込むぞ』とでも言うつ
もりだったんでしょ？あ、そうそう。知ってる？私達はCクラス
と仲が良いのよ？だって、危うくFクラスにバカにされながら騙さ
れることをあなた達が来る前に伝えたのだから。怒り浸透してたわ
ねえ……だって、自分達よりバカばかりが集まるFクラスにバカに
されたのだから……。そうね。雄二なら五対五の勝負にしたかった
のだろうけど……。どうする？本当に五対五にしたいの？別に私は良
いわよ？私達に三勝できる自信があるのならね。」

「……………」

文が長いね。うん、なんかごめんなさい。
で、でも凄くない？コレを一息で言っただよ！？
褒めてくれてもいいぐらいの凄さだよ！

えっ？ウザイ？

ごめんなさい（´・・´） シュン

なんだか雄二達Fクラスが黙り込んだ。まあ、仕方ないかな？
自分が考えていた策が完全によまれてたんだから。

Aクラスもなんだか凄く静かなんだけど……ま、いつか。

べ、別に静かな中で小さく『シュン』としてる桜華様なんて……桜華
様なんて……（ブシャアアアア）とか聞いてなんかいいんだから
ねっ！！

「……返事もないのかしら？まあ、いいわ。そんなあなた達に妥
協案をあげても良いわ。」

「……聞こう。」

雄二の元気がない。この妥協案に頼るしかないのだから仕方がない
こともある。

そんな中、私は唇を開く。

- - - 「私達Aクラス、Cクラス、Eクラスは同盟をくんでいます。そんな私達にあなた達Bクラス、Dクラス、Fクラスがチームを組んで学年戦争をしましょう。」

私と優子と作戦と・・・

「雄二、どうする？どうせこのまま戦ったら負けるんだし……賭けてみる価値はあるわよ？」

私は笑う。

楽しそうに。

狂気じみた笑いをする。

そんな私を真っ直ぐ真剣な眼差しで見つめる雄二。数分は見つめ合った。その数分が周りには何十分に感じたのかもしれない。

やがて、雄二は目を伏せた。そして、次に顔を上げた時に見せた表情は何かを覚悟したような眼をしていた。

「……交渉、成立のようね。」

なにも語らずとも雄二の鋭い瞳がすべてを語っていた。

後ろで翔子が悶えているのが手にとるようにわかる。今の雄二にはそれだけのカリスマがあるのだから仕方がないのかもしれない。

「提案だ。この試合、負けた方がクラスに一つずつなんでも言うことを聞く……なんてどうだ？」

「あら、良いのかしら？わざわざそんなこと言って……後悔するわよ？」

「しないさ。俺たちが勝つんだからな。」

「へえ……いいわ。その挑発、乗ってあげる。試合開始は今日の昼休みの鐘が鳴った瞬間に開始する。勝敗はそれぞれのクラス代表を討ち取ること。……こんなところかしら？」

「ああ、交渉成立だ。」

そう言って雄二達は自身のクラスへと帰っていった。

ああ……原作ブレイクって、なんてゾクゾクするのかしら

） 優子 side ）

教室内が凍えたような気がした。

それが私を感じたことだった。相手側の代表と天月さんとの交渉は
壮絶の一言だった。

いや、もうあれは天月さんの蹂躪とよんでもいいくらいの激しさだ
った。

私と天月さんはつい最近知り合ったばかりだけど……女子の皆が惚
れるのも無理ないわね……実際に私も……危ないしね……

「聞いていた通りになったわ。誰かCクラスとEクラスに今回の
ことを伝えた上で連れてきてちょうだい。」

さっきまで交渉をしていた天月さんが教卓にたって指示をだす。副
代表である天月さんの言葉にすぐに従うAクラスのみんな。

「翔子はこっちにきてくれないかしら。作戦に穴がないか調べた
いから。」

「……わかった。」

作戦？いつのまに作戦を？Fクラスの代表達が帰ってからまだ五分
とたっていないのに……。やっぱり代表や副代表との差は凄そうだ
なあ……

それにしても……天月さん、格好良かったな……私と秀吉の違いも完全に見分けてたし……。

やばいわね。本気になっちゃいそう。

咲夜
 Side

ああ、桜華様。なんて美しいのですかっ！？ああ、桜華様のあの真剣な瞳がすごく……すごくいいっ！！あの瞳で私を貫いて下さい！もう、私、我慢ができません。どうかこのような不甲斐ない咲夜をお許し下さい、桜華様っ！！私は……もう無理ですっ！！

そ、そんなっ！！このような状況で誰にも気づかれないようにシュンとする桜華様……

「シュンとする桜華様なんて……桜華様なんて……（ブシャアアアアアアアッ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！）」

桜華 Side

やっと視点が帰ってきた。

なんだか微妙に変なモノが入ってきたような気もしないこともないけど……あまり気にしないようにしましょう。寒気がするしね。

「……………つてところよ。質問は？」

「桜華様、よろしいでしょうか？」

「なにかしら？」

「この作戦をする場合、私達はどうするのでしょうか？」

「ふふつ、それは勿論決まってるわ。」

今からが楽しみね。

私と開戦と学年戦争・・・

只今の時刻、午後1時35分。

昼休みが終わる時間。

そんな時刻に私達は闘気を身体中に巡らせていた。

今から起こる『戦争』はこの学園が始まって以来の例外。私達Aクラスと、同盟を組んでいるCクラス、Eクラス。そして、Fクラス、Bクラス、Dクラスとが同盟を組み戦争をする異例の『戦争』。

そんな『戦争』の火蓋が今落とされようとしているのだ。

こんなに緊張感がする戦いは私達『幻想郷』に住まう者には日常茶飯事のこと、『スペルカードルール』によって物凄く盛大な戦争ともいえるぐらいのことをしているのだから……。

だが、今回は少し訳が違う。

初めての試験召喚戦争を行うのだ。普通なら不安が重くのしかかるのだろうが、私は違う。

楽しい。

いや、楽しいのだ。

これが吸血鬼としての性か、今の私は戦闘に飢えている。

- - - そんな私の状況などいざ知らず、

- - - 昼休み終了の合図は、

- - - 鳴る。

「前線部隊、突撃せよっ!!」

さあ、楽しくなるわよ？

） 咲夜（真面目ver.）side ）

私は今、前線で桜華様が考えられた作戦の第一段階を成功させる為

に最前線で部隊長である工藤愛子様の隣で戦況を見ています。

「十六夜さん、天月さんが言ってた通りになると思う？」

指令が一息ついたのか工藤様が私に話しかけてきた。

「勿論です。ならない通りなど一寸たりとも御座いません。」

「そつか……ふふ、信頼してるんだね」

「ええ、私の全てを捧げた唯一無二の主ですから。」

ええ、信頼しないはずがありません。私達紅魔館に住まう者が桜華様を信頼しないなんてことはありません。

何故なら全員が桜華様になんらかの形で助けられたりし、揺るぎない忠誠を誓っているのですから。

そう。全員です。

妖精も魔法使いも悪魔も人間も。

こんな私も。

それに、桜華様は一度言ってくれた言葉があります。今も心に残る言葉。

それは私が『なんで無償で、時には自分が傷ついてまで私達を助けるのか。』と聞いた時でした。

そんな質問に桜華様は

――――『なんで私が無償に助けるか……。……そんなの決まってるじゃない。私達が『家族』だからよ。』

歡喜で体が震えたのをよく覚えてます。元々この紅魔館を乗っ取るつもりでやってきた私を家族として扱ってくれたことに心がとても暖くなり、涙が込み上げてきた。あの日のことは忘れようにも忘れられません。

「十六夜さん？どうかしたの？」

おっと、どうやら思い出に浸りすぎたようですね。

駄目ですね。私は完全に洒落なメイドでないといけないのに……
例外を除いて。

「大丈夫です。なにかありましたか？」

「うん。伝令が来て『作戦通り。既に作戦は遂行せし。』だっ

て。どうやら天月さんの言った通りになったみたいだよ。」

「そうですか。でしたらそろそろ此方も来る頃でしょうね。」

流石桜華様です。始まって10分で作戦を成功させるなんて……。

此方もあなたの期待に沿えるよう、頑張らせて頂きます。

） 咲夜 side out ）

私と作戦 と学年戦争・・・

） 小山友香 side ）

初めまして……になるのかしらね。実際に桜華と会ったのはあの時が初めてだったしね。

ある日、私が恭二の悪巧みに付き合ってFクラスを叩きのめそうとした時だったわ。

突然私達の教室の扉が開いた。その時は恭二もいて、作戦を考えていた時だったから警戒していて、扉の前に見張りを立たせていたのにも関わらず。

当然私達は戦闘体制に入った。もしもそれがFクラスだった場合はすぐに叩きのめす為に。

しかし、それは違った。良い意味でね。

「少し、良いかしら？」

私達のクラスに入ってきたのは今、女子達（先生含む）の間で噂になっている桜華・S・T・天月だった。

桜華は私達の返事など聞く気もないみたいで、返事を言う前にさつさと私達が座っている机えとテクテクと歩いてきた。

話を聞く気がないことに腹が立ちはしたけど、何故かそれが普通に感じたのは今世紀中最大の疑問ね。

どうやらそれは恭二も同じみたいだった。

「単刀直入に言うわ。小山友香さん、それとCクラスの皆さん、予言してあげる。貴方達はAクラスの木下優子さんに変装したFクラスの木下秀吉くんに、Fクラス代表の命令で確実にバカにされるわ。」

それだけ言って去っていく桜華。意味が分からない。

なんで私達があのFクラスにバカにされるのかしら？

周りの生徒達は「でた！正解率99・99%の天月さんの予言！！」とか、「ああ、天月さん、あなたはなんで天月さんなの……？」とか言って、なにか興奮した様子だった。

しかし、正解率99・99%ね……。

信じてみる価値はありそうね。

後日、私達は本当に馬鹿にされた。

彼女、桜華がいった通りの展開に陥った。

本当に……桜華は何者なの？

私はその答えを聞くためにAクラスへとすぐに向かった。もちろん、見張られているということも視野に入れて、激怒したふりをしながらね。

Aクラスで桜華を見つけ、話しかけようと近づいてみると、そこにはAクラス代表の霧島翔子と優等生の木下優子、学年三席の久保利光、そして転校生の工藤愛子と桜華の従者で名高い十六夜咲夜が集まって桜華のパソコンを覗きこんでいた。

私もなんだか気になったから隙間から覗き込んでみると、そのパソコンに映っていたのはたった今起きているBクラスとFクラスの試験召喚戦争の様子だった。

……ていうか、完全に犯罪よね……それ。

「なにしてるのよ。」

「あ、やっと来たみたいね。咲夜、紅茶を淹れて頂戴。さ、なに突っ立ってるの？ さっさと座りなさい。」

「え、ええ。」

やっと来た？私が来ることがわかっていたのね。まあ、あんな予知ができるくらいだからこれくらい簡単か。

それにしても相変わらず上から目線ね。何故か心地よい感じはするけど……。

「さて、貴方の質問は無視するわ。なんと聞かれようがスルーするわよ。で、今から言つのが私の計画。作戦名は『作戦』よ。」

「……………」

なんにも言つ気になれない。上から目線過ぎるでしょっ！！

しかも作戦 って……それっぽい感じでいつてるけど、全然ネーミングセンスないからっ！

「桜華様、紅茶です。」

「ありがとう。じゃ、話しましょうか。私の作戦を。」

「友香、話してなんだ。この学年戦争で手を抜けとかなら断る

ぞ。こっちも失った信頼を取り戻さなきゃなんないんだ。」

「違うわ。恭二、貴方達Bクラスには私達へと寝返って欲しいのよ。貴方だってFクラスに仕返したいでしょ？それに、コレはチャンスよ。Fクラスを試験召喚戦争でのルールにのっとり、3ヶ月間の宣戦布告行為を奪ってしまえば貴方は簡単に失った信頼を得ることができるわ。」

コレこそが作戦。Fクラス連合チームの最大戦力であるBクラスを味方につける。これをしてしまえば彼らFクラスが待つのはたった一つ。

それは『戦死』。

「……詳しく聞かせろ。」

「そうね。詳しくは作戦を考えた桜華に聞いてくれない？私はBクラスが寝返ってくれるようならいつ寝返るかを言うのを命じられただけだから。」

実際その通りだ。そして、この場所は桜華によって監視されている。どうやら私がBクラスに襲われた時のためのようだ。私のスカートに入っている小型発信機をオンにしたら十六夜さんが速攻で駆けつけるっていていたけど……本当なのかしら……

「……。」

やっぱり簡単には領かないわよね。ま、流石は桜華、こうなることも予知してたか……

「……そうそう。桜華はこうも言っていたわ。『負けた者が勝った者に『卑怯者』と罵るのはただの負け惜しみ。勝てば官軍よ。』ってね。確か恭二の思考と一緒にだったわよね。」

揺らいだ。今、嬉しそうに笑った。同じ思考をしている人に出会ったからかしら？

そっというのは私にはわからないからなあ……

「……良いだろう。いつ寝返ればいい？」

「……姫路瑞希、または土屋康太が戦死したときだそうよ。」

伝えることは伝えたい、今は敵同士。あまり長話していると今回の計画が感づかれるし、帰るとしよう。

「じゃ、帰るわね。」

「おう。」

そのことを恭二もわかっているのか、簡単に返してくれた。

そういえば、十六夜さんに貰ったこの『桜華・S・T・天月を愛する会』っての……どうしようかしら……しかもNO・5って……友達でもNO・630だったのに。

私と最前線と学年戦争・・・（前書き）

少し長くなりました。これだけなのに、考えていると……頭が痛くなりましたorz

私と最前線と学年戦争・・・

出番がやってきました桜華さんです。友香に突っ込まれたり、咲夜が不自然に真面目になったりしたような気もしないでもありませんが……気にしないでおきます。

いえ、むしろ無視します。

だって……感じちゃうんだm（ry

「副代表、どうやら姫路瑞希と土屋康太がFクラス本拠地を出撃したようです。」

「了解、貴方は次の段階に移る準備をするように翔子と優子にいつておいてくれる？私は根本君に用があるから……」

「わかりました。御武運を……」

なんだかこうやって聞いていると伝令の人ってイケメンだね。でもさ、知ってる？この子、女の子なんだよ？

顔を赤らめて私と話してるんだよ？
風邪かな？

とか定番なことを言う桜華さんではありませんよ。ええ。
だって幻想郷でこういう反応は見飽きているんですもの

……いや、テンションあげてるけどね、無理だから。なんで性転換して女の子に好かれなれないといけないのよ。そんなことなら前世の時の『俺』を好いてちょうだい……

「天月部隊、そろそろ準備しておいて。最前線にいるのはBクラスとFクラスだけど、できるだけ点数を減らさないように注意なさい。Bクラスも一応仲間だからできるだけ戦死させないようにね。」

「了解です、お姉さまっ！！」

やめてっ！これ以上私の精神力を削らないでっ！！

ふふ、ふふふふふ負腐怖。……咲夜……あなたよね。

あなたのせいよね？だってこの前『桜華・S・T・天月を愛する会 NO・0』って書いてあるカード隠し持ってたしねえ……。貴女がこの意味の分からない会の創設者ってことはNO・0の時点でわかりきっていることよ。

どうしようかしら……。なにか罰でも与えてみようかしら……。たとえば犬耳、尻尾、首輪をつけて四つん這いにして犬言葉を話させて一日中私のいいなりになるっていうのは……。駄目ね。逆に興奮してそうだね。あれ？もうどうしようもない？

アハハ……。そのうち家ででもしようかしら？霊夢とか魔理沙の家でも行くか、紫の家に行くかね。紫の家なら安全だけど……。

「伝令っ！土屋康太と姫路瑞希が戦死致しましたっ！！」

「わかったわ。……皆、時は来たわ。私達Aクラスはこれより最前線突き抜けFクラス本拠地へと攻撃する。今こそAクラスとFクラスとの格の違いを見せつけるときよ。破滅をもたらせっ！邪魔する者は『力（学力）』を持って切り捨てろっ！！さあ、蹂躞せよっ！！！」

） 咲夜side ）

「そろそろ向こうも出さざるをえないでしょう。工藤様、準備をいせおいてください。」

「オッケー、腕になるね」

そう言って前方を自信満々の表情で前方、工藤様の相手である土屋康太様がいるであろう方向を見えています。

私も相手することになる姫路瑞希様がいるであろう方向を静かに見据える。

はつきり言ってしまうえば簡単に倒せるでしょう。此方は桜華様によって相手側の主戦力の腕輪の能力、武器、操作技術、操縦者の性格を全て教えて貰った情報がありますから。

これだけの情報があるだけでも有利なのに、さらに私達は霧島様と桜華様に少々勉強を教えて貰いました。私と工藤様、木下様、小山様の4人は個人差はあるでしょうが、おそらくプラス100点いつているでしょう。

なんといったって私が一種の閉鎖空間を能力の応用で作り出し、時間を遅くして1日徹夜したのですから。

もちろん、時間を遅くしただけですので寝る時間はしっかりと作りましたよ？

これぐらい、完全で瀟洒なメイドの私にとって当たり前ですわ。

「伝令、目標が来ましたっ！」

「分かりました。では工藤様、『作戦』を開始致しましょう。」

「うん。じゃ、行こっか」

私と工藤様を中心に、他のAクラスの比較的得点が高いモブky：生徒が囲み、『作戦』のターゲットである姫路様と土屋様の所まで突進を仕掛けます。

幸い、ターゲットはFクラス本拠地への直線ルートにいたので、二人は自分がターゲットだとは一寸たりとも思っていないでしょう。

『作戦』とは、そういった心理をも組み込んで考えられた作戦なのです。

「と、止まって下さい！」

「……………これ以上は行かせない。」

想像通り立ちふさがりましたか……。流石桜華様です。『運命を操る程度の能力』でもお使いになられたのでしょうか？それともただの『異常^{アブノーマル}』なのでしょうか？

まあ、どちらにしろ私が桜華様に忠義を違えることは『絶対』にあり得ませんがね。

「敵、最大戦力級を発見しました。十六夜部隊の方の一人は霧島様に報告を。そのほかの十六夜部隊の方は第二防衛ラインについて下さい。工藤様の部隊は展開し、私達の戦いに邪魔が入らないように第一防衛ラインにて防衛に徹底して下さい。」

「…………十六夜さん。私の仕事とらないでほしいな…………。」

どうやら桜華様のご命令が達成になり、嬉しすぎて出すぎた真似をしてしまったみたいですね。工藤様のお仕事をとってしまうなど、完全に洒落なメイドとして失格ですね。

私達がいう『第一防衛ライン』とは私と工藤様から7 m程離れた墓所のことです。工藤様の部隊の方々はそこで私たちを囲むようにして邪魔が入らないようにしてくれています。『第二防衛ライン』とは私と工藤様から5 mほど離れた場所で、そこでは第一防衛ラインの方々より少し点数が高い方々が蟻を一匹も通さないような勢いで頑張ってくれています。

当然ですよ。私が泣く泣く会員である十六夜部隊の方に『桜華様が涙目で此方を上目使いをしながらみている写真』をコピーして配っているのですから。

もちろん、このことは桜華様は知りません。なんせ時間を止めて写真を撮っているのですから。あ、私の会は創設者である私以外はコピー禁止です。もし、私以外がそんなことしようものなら1000人以上いる会員達が怒りの鉄槌を下すことでしょう。

「すみません。どうやら有頂天になりすぎたようです。」

「大丈夫だよ。的確な判断だったし、私だったらあそこまでの確に言うことはできないよ。それより、相手さんがお待ちみただよ？」

「そのようですね。」

私としたことが……まさか、今回のターゲットである二人を視界に抑えることを忘れるなんて……。しかし、わざわざ私たちが話し終わるのを待っていたのですか？

いい人ですね。……完全で瀟洒なメイドとしての意地がある今の状態でなければ……十六夜咲夜の状態であればいい友人で有れたでしょう。

「えーと……もういいんですか？」

「ええ。お待ちいただいております。今回、姫路様のお相手を務めさせていただきます。十六夜咲夜と申します。どうか本気でかかってきてください。試験召喚^{サモン}っ！」

「えっ！？こ、こちらこそよろしく願いますっ！さ、試験召喚^{サモン}っ！」

私のようなメイドとは会ったことがないのか、うるたえながら試験召喚獣を召喚する姫路様。……おしいですね。コレが桜華様だったら……ああ、いけません桜華様！そ、そんな……ああ……（ブシヤアアアアアアア）

「え……と、だい……丈夫なんですか……？」

「ええ。問題ありません。（ポタポタ）」

「……………同類の匂い（キョロキョロ）」

失礼ですね。土屋様。貴方みたいな変態でエロのことしか頭にないことが理由で『ムッツリーニ』とまで呼ばれるようになった方と一

緒にしないでいただきたいです。私は『桜華様だけ』を愛し、愛で、時にはフィルムに収め、写真を現像し、ファイルに保管し、それが現在500を超えようとし、愛玩動物を見るような眼で見ているだけですので……。

「あははは……十六夜さんは変わらないね。」

「ありがとうございます。」

「いや、褒めてないんだけど……。まあいいや。こっちも始めよつか、ムツツリー二君？」

「……………ムツツリなんかじゃない（ブンブン）」

どの口が言いますか……ああ、その口ですね。失礼いたしました。あちらも始めるようですのでこちらも攻撃させてもらおうとしましょう。あちらはいつ攻撃したらいいのかわからない様子ですし。

卑怯？そんなものはどうでもいいです。私は桜華様だけの評価があったらそれだけで……。

「『ジュラルメント・ファンタジア時空幻想奇術発動』。【幻符『殺人ドール』】。モタモタしていますと、串刺しになりますよ？」

「え？…きゃっ!？」

『リアルメント・ファンタジア』

『時空幻想奇術』。私が使う腕輪の能力を発動する為に言わなければならぬ発動キーです。桜華様が学園長に脅し……お願いして作った少し変わった腕輪の能力。幻想郷で使われる『スペルカード』を召喚獣用にした腕輪です。ちなみに桜華様もこれと同じような設定がされています。今回私が使ったのは『幻符『殺人ドール』』の劣化版です。ちなみに一回使うごとに100点です。燃費は微妙にいいので、重宝しています。後二つ、この腕輪には能力があるので、それはまたの機会に話すとしましよう。

申し遅れましたが、私の召喚獣の姿はミニスカートのメイド服姿。武器は私がいつも常備しているシルバー制の特注ナイフ。動物は犬……でしょうか？

「おしいですね。」

「いきなりなにするんですかっ!？」

「いま、戦闘中ですよ？攻撃するのは当たり前でしょう?。」

とつさに大剣で弾いたようですがいくつかは刺さったようです。少しは点数を下げることに成功しました。

『Aクラス 十六夜 咲夜 化学 658点』

VS

Fクラス 姫路 瑞希 化学 403点

『Aクラス 十六夜 咲夜 化学 558点

VS

Fクラス 姫路 瑞希 化学 296点』

まあまあ、の成果ですね。

それにしても、これで仕留められると思ったのですが……流石に三戦もすると操作技術が上がっていますね。ということは案外Fクラスの幹部クラスが一番の難関なのでしょうか？

まあ、今はこの作戦の成功の為に尽力を尽くしましょう。

「そろそろ補習を受けなくなってきたんじゃないやありませんか？」

「そんなわけありませんっ！私はFクラスの皆さんのために頑張りたいんですっ！」

……姫路さん。あなたのそれは美学ですが、私達からしたらそれはただの甘い人が言うセリフなんですよ？

元々闇の世界で生きてきた私達紅魔館の人間はそういう甘さが一番嫌いなんですよ。まだ、あ私でよかったですね。その言葉を桜華様の前で言うとは徹底的に『壊されますよ？』

「……さつさと終わらせましょう。『ジュラルメント・ファンタジア時空幻想奇術発動』 咲夜の世界』」

私がそう告げた瞬間、世界が止まった。私はそんなことを気にせず、に召喚獣に持っているナイフを姫路様の召喚獣の心臓部分に投げるように指示する。

「『そして世界は動き出す』」

……ヒュン……グサッ

「……え？」

なにが起きたかわからずに呆然とする姫路様。

「すみません。私にとって桜華様の命は全てなんです。」

「戦死者は補習っ！！」

ふう、なかなか疲れるものですね。これならやはり自分で戦闘したほうが楽な気がします。

西村教諭もなかなか大変ですね。Fクラスの担任、補習までしておきながら普通の先生がするような書類処理、また、試験召喚戦争時の補習観察者。戦死者が逃げないように連れて行ったりもする。

過労で倒れないかが心配ですね。

おや？工藤様もなんとか倒したようですね。

では伝令をだしましょう。

「伝令の方、土屋康太、姫路瑞希共に戦死致しました。桜華様と霧島様に報告をよろしくお願いします。」

桜華様、貴女からの命は果たしました。

ですので

また、写真を撮ってもいいですよね？

正確にはワイシャツと下着だけを身につけて、涙眼がよろしいかと……あ、すみません。鼻血が……（ふがふが）

私と裏切りと学年戦争・・・

やあ、みんな。ちょっと頑張つてミ　キーの物真似で挨拶してみた
桜華さんだよ。

いやあ、なんだか寒くなつたねえ。知ってる？私、さっきから背筋
が寒くてたまらないの。それに何故だか体中が小刻みに震えてるみ
たいだし……。

なんだか、咲夜に（　限定）なにかさせられそうな予感が……いえ、
それ以前になにか私の黒歴史のような物が出回っているような……。

………気のせい………よね？

………ただの考え過ぎ………よね？

- - - 禁則事項ですつ

今そのネタダメEEEEエツツ！！！！

それはもうアレだからっ！答え言ってるような物だからあつ！！

「島田さん、天月さんが来たよっ！……島田さん？」

「……………（相変わらず綺麗よね……女として自信無くしそう。いや、でもそれなら美春……とまではいかないけどそれなりのスキップをとって……そしてあわゆくば……えっ！？そんな……いかなり結婚だなんて……………）」

「……………？ 島田さん、なんでそんなに嬉しそうなの？」

「へっ？……………べ、ベベベ別に桜華と結婚する妄想をしてたとかそんなじゃないんだからあっ！」

「ちよっ、ちよっとタンマッ！！いきなりラッシュっ！？」

……………私の目の前で激闘を繰り広げる美波と吉井。いえ、美波の虐殺でしかないわよね。吉井はそれを避けてるけど……………マトリックスでそれにしても貴方達人間……………よね？はつきり言って美波のパンチなんか結構速いし、威力も小妖怪程度なら一発で殺せるぐらいあるわよ？

「……………天月部隊、突貫せよっ！！」

にしても、私達がいることを忘れるなんてダメじゃない。部隊を任されている身としては完全に失格ね。

私の命令を受け、私を愛する会とかいう馬鹿げたコミュニティの

構成員だと思われる天月部隊の隊員達が言葉の通り突貫しようと走る。

「島田副会長、そこを退いてください！邪魔をするのであれば天月様を愛する会のNO・2であろうともコレが天月様の命令ならば、貴女を倒さねばなりませんっ！！」

「紫月さん……ダメよ。私はFクラスの副部隊長としてやらなければならない責任があるのよっ！！」

ちよっつつつつつつと待ちなさいっ！！なに？咲夜がNO・0の創設者で美波がNO・2？

桜華・S・T・天月を愛する会の事実上のNO・3になんで美波がいるのよっ！？やっぱり一年の最初に色々と手助けしたのが原因っ！？

そういえば原作では見せないけど……かなり女の子らしい表情とかしてたしね。ちよっとだけ納得だわ。あまり、というか全然私を愛する会の方は納得してないけどねっ！

「島田副会長……くっ、こうなったら私達は貴女を越えていきますっ！！」

「来なさいっ！紫月さん達はAクラス……どうせ勝てないだろうけど、副会長の誇りを見せてあげるっ！！」

「……島田さんが遠い（ボソッ）」

……。

………もう私に言うことはなにもない。

………もうなんもあえねえ……

それに聞こえてる？吉井にあんなことを言われてるのよ？入学当日にセーラー服を着てきたあの吉井に……。

ま、いいわ。あの子達なら私の考えた作戦通り動くでしょう。後は任せましょう。

「高橋先生っ！Fクラス、吉井明久が天月さんに総合科目勝負を挑みます。試獣召喚っ！！」

……馬鹿なの？馬鹿だったわね。

「……馬鹿ね。私に総合科目で挑むなんて。」

そんなにわかりきった答えをみたいのかしら？激しく意味が分からないわ。私が学年二位だということはわかりきってるはずだし、雄

二のことだから私のことも幹部メンバーには話してあるはず。

それなのに仕掛けてくるなんてね。

「試獣召喚っ！！」

私は召喚獣を出す合い言葉を叫ぶと、首から上だけを吉井に向ける。眼は少し鋭くしておく。これで、相手がビビったら簡単に倒せるからね。

私は私に挑んできた吉井に返すように召喚獣をだす。

私と吉井の間の廊下の地面の上に魔法陣が現れ、その上にボウツと計七つのそれぞれ色が違う小さな焰が現れる。それらは引き寄せられるかのように中央に円を描くように集まり、虹色の焰を作り上げた。そして、その焰を切り裂いたかのように七色の焰が縦に割れ、その中から私と同じように首から上だけ向けた格好をした召喚獣が現れた。動物は白虎だろうか？白い猫系の耳と白い虎のような尻尾がついている。犬歯が鋭く、爪もそれなりに長く鋭い。武器は日本の刀がある。防具は上がサラシで、下が黒で青いラインが入った長ズボンだ。また、顔には頬から目の下あたりにかけてちよつとした赤色の刺青がしてある。

一つだけ良いかしら？

格好いいっ！！

なんでこんなに出現方法が格好いいのっ！？まさか、私が10億円

ほど学園長に上げたからからそれで気をよくして……なんてところかしら？

だって他と比べて凄く気合い入ってるもん。

「『呪縛せし兎と禁忌を犯せし道化師（サージュームーン・クラウドンビッテイション』）。【束縛『神のルール』】。」

「えっ！？ちよつ、なにコレっ！？」

『桜華・S・T・天月
VS
総合科目 8679点

吉井明久
総合科目 764点』

『桜華・S・T・天月
VS
総合科目 8579点

吉井明久
総合科目 523点』

うわぁ……物凄い点差ね。まあ、今回は私もそれなりに本気でやってみたしね。こうなるのも当たり前かな？

私の腕輪も使ったしね。『呪縛せし兎と禁忌を犯せし道化師（サージュームーン・クラウンビッティション）』は腕輪を発動させるための鍵よ。私も咲夜も能力が強い分、発動キーを長くして隙を大きくさせるのが学園長の譲歩みたい。私のさつき使った『束縛』『神のルール』は私のオリジナルスベルカードよ。幾つもの鎖鎌を相手に巻き付くように飛ばし、相手の身動きを取れなくするスベルカード。鎖鎌には魔力、神力、妖力、霊力が使えないように設定されてるから完全拘束だね。

まあ、召喚獣相手には意味がないんだけどね。

「あ、天月さんっ！一体どうしてこんなことを……っ！？ま、まさか僕にSMプレイをする気なのっ！？待ってっ！まだ心の準備が……。」

「……………馬鹿なのね。やっぱり。その身動きが取れない状態でそんなことを言うなんてね。ま、それもここまでよ。」

「じゃ、根本君。周りの子達は潰したから後は煮るなり焼くなり切り刻むなりして楽しんで頂戴。その鎖鎌は持続効果があつて、私がフィールドを離れても消えないわ。攻撃するのは召喚獣だけよ？フィードバックがあるから充分でしょ？」

「ああ、わかった。まあ、物足りないがな……これよりBクラスはAクラス達に味方する。天月、俺たちはすぐに終わらせて突撃するから先に行っておいてくれ。」

「ええ、待っているわ。高橋先生、この勝負は根本君に受け継ぎます。」

さ、で。私も咲夜と合流してから行くとしましようか。

Fクラス本部へ……………

私と決着と学年戦争・・・（前編）

根本に吉井という名の餌をあげて、さつき意味の分からない会を作った張本人である咲夜とその部隊の人達（十六夜部隊も全員が桜華・S・T・天月を愛する会に所属）と合流した桜華・S・T・天月だよ

さつきから熱い視線が私に向かってきて暑い暑い。私の能力で自身に『絶つ程度の能力』を付与したから苦にならないけど。

ま、それはおいとして……さつさと作戦に取り掛かるとしましょうか。

） 翔子 side ）

今、私と優子の部隊はFクラスの前の廊下にいる。

私達は情報戦で一番やっかいな土屋康太と最大戦力の姫路瑞希を十六夜さんが倒したっていう情報を桜華が寄越した伝令の人に聞いた

直後、ここへやってきた。

今から始まるのは私の我が儘。

Fクラス側の幹部は後優子の弟だけのはず……他の幹部とFクラスの生徒達、Dクラスも『全て』桜華と十六夜さんの『二人』によって倒されたはずだ。

桜華と十六夜さんの部隊の人たちは私と優子、愛子、久保の部隊と合流している。でも、桜華の部隊も十六夜さんの部隊も私たちの部隊に入らず、別の部隊を作っていた。その部隊をまとめ上げるのが、桜華・S・T・天月を愛する会のNO・110であり、Aクラスの桜華・S・T・天月を愛する会のそこそこのNO・で、成績も私達幹部の次に強い『佐藤 美穂』だ。彼女こそ、私達Aクラスの最大の空気さんだ……私はなにもっていない。

Bクラスは桜華の作戦によって寝返ったから倒す必要もない。簡単に裏切るような人達だから油断はしないけど……。

「……………後は桜華と十六夜さんが来るのを待つだけ。」

「代表、本当に大丈夫なの？副代表は一応頭はいいけど副代表よ？それなのにあの莫大な人数を二人だけでたおすなんてできるのかしら？」

「……………できる。桜華と十六夜さんは力を隠している。優子はあの二人がどうやって今の地位についたのか知っている？」

「知らないわ。普通にテスト時間フルに使ったんじゃないの？」

「……………違う。あの二人はテスト終了時間１０分前に書き始めて今の地位に就いた。」

「「「えっ!?!」」」

「「「「「「「常識ですっ!!今回天月様が３０分だけで７０００点以上とったことも常識ですっ!!!!!!!!」」」」」」

……………いつの間にこっちに耳を傾けていたのだろうか？

「「「「「「「天月さまの話聞き逃すはずがありませんっ
!?!」」」」」」

……………ナチュラルニ心を読むのもやめてほしい。桜華のことになるとなんでもできるのがすごいけど……………なんだか怖いものがある。
……………桜華のストーカーに見えてしまうのはなんでだろう

「「「「「「「褒め言葉ですっ!?!」」」」」」

……………本当に勘弁してほしい。

） 桜華 side ）

「ふう……なかなか鬱陶しかったわね。ちょっと点数が減っちゃったわ。」

「そうですね。私も少しかすってしまったようです。」

『Aクラス 桜華・S・T・天月 数学 670点 & A
クラス 十六夜咲夜 数学 543点

VS

Dクラス & Fクラス 数学 0点
』

流石に少し疲れたわ……80人前後を一変に相手するのは……

まるでゴキブリのように湧き出てくるから鬱陶しくなって『呪縛せし鬼と禁忌を犯せし道化師（サージュームーン・クラウンビッテイション）で『凍符『ブルースター』』を使ってしまったわよ。

【凍符『ブルースター』】は私の前と左右を凍気を纏った弾幕がラ

ンダムで動き回り、時には止まったりして相手の動きを一度完全に止める技だ。また、この技は私の魔力と妖力を込めてあるので殺傷能力も高い。

そして、この技に当たらなかった相手には咲夜の『ジュラルメント・ファンタジア時空幻想奇術』で『傷魂『ソウルスカルプチュア』』を発動させてさつさと片付ける。

でも、これを抜けてくる奴ももちろんいる。が、掠りはするものの簡単に戦死をする私たちではない。咲夜はグサリと、私はグチャリといった風に切りつけ、刺し続ける。

「咲夜、翔子がお待ちかねみたいだからさつさといくわよ。能力使用を許可するわ。」

「はい、フガフガ桜華様」

……いつの間に鼻血を出していたのかしら。まあ、いいわ。よかないけどよしとしておきましょう。それが紅魔館の主としての器量の見せどころよ。

こんなところでみせてもしよばいだけれど……まあ、気にしない方が吉よね。

「では、行きます。パンチラの準備はよろsh……とにかく行きますー!」

「ちょっと待ちなさいっ！何か不吉なことを言おうとしなかったかしらっ!？」

絶対『パンチラの準備はよろしいでしょうか?』って言おうとしたでsh(ピタッ

）
翔子side
）

「……………終わつたみたい。」

「咲夜、あなたに罰を与えるわ……………1つ、一週間の間、緊急時以外『ワン』としない。2つ、私の着替えは口だけで、お風呂は身体全体を使いなさい。3つ、一週間の間、基本は四足歩行よ。いいわね?」

「よ、よろこんだ……………畏まりました。これも罰です。仕方ありません。」

「……………やっぱりこうなったか……………完全に喜んでるし、昔の咲夜は何処へ……………」

なんだか桜華も色々大変そう。でも、その罰は魅力的だと思う。
行く行くは私も雄二に……。……。危なかった。私も十六夜さんの
ようにトリップしてしまいそうになった。

それよりも、やっぱり色々と迷惑をかけたこの二人には謝っておか
ないと……。

「翔子、謝罪なら受け付けないわよ？」

「わん。わんわんわん。（そうですよ。私達がやりたくてやつ
たのですから気にしないでください。）」

「……………あり、がとう。」

……本当にこの二人は私の最大の親友。なんでもっと早く会えなか
ったんだろう、と後悔してしまうほどにいい人たち。もしかして、
こんなにも早く友達に……。いや、親友になれた人は初めてかもしれ
ない。雄二は小学生のころは結構皆のことを下に見ている節があっ
たし、恥ずかしがり屋だからすぐには友達になれなかった。それは
優子達も一緒。皆、友達からすぐに親友になることはできなかった。
でも、この二人は違う。出会って三日しか経ってないのに、もはや
居て当然かのように思ってしまう。それがこの二人の不思議なところ。
そして、そんなところに私達Aクラスは助けられている節がある。

勉強がほとんどなAクラスの中で十六夜さんと一緒にゆったりと
している二人。まるで、休み時間にも勉強などをしている私達に少し

は休めと言っているか用に休み時間を優雅に過ごす。Aクラスに入ったからには休み時間も勉強をしなければいけないという思考自体を破壊するかのようにまったりと過ごす二人ははつきり行つてこのAクラスのなかでは異様な存在だった。けど、その異様さが私達Aクラス一種の癒しを与えてくれた。

代表である私にできないことを簡単にしてしまう二人は本当に脱帽してしまう。

そして、なんの恥じらいもなく『わん』と言い続ける十六夜さんにも脱帽してしまう。流石は桜華・S・T・天月を愛する会の創設者なだけはある。

「さ、翔子。愛しの坂本君がお待ちよ？」

「……副代表。愛しの、とはどういうことかしら？」

「そのままの意味よ。ね、翔子。」

「……………うん。」

桜華たちとたわいもない話をしながらFクラスに入る。

そう、この人たちがいるかぎり私に……私たちに負けはない。

私と決着と学年戦争・・・（中編）

「まったく……副代表と十六夜さん、私達が待っている間に何があつたのよ。」

「……私に聞かないで頂戴」

「わんわんわんわん？（いつもどおりですがなにか？）」

なにがいつもどおりなのかしらこの駄犬が……。いや、駄犬って言っても絶対喜ぶのでしょうね。SM的に考えて。

原作の咲夜は……もういない。否、原作のキャラは誰もいなくなつた。キャラ崩壊的な意味合いで考えて。

ちなみになんで咲夜の言葉が皆に通じているかというと、スケッチブックになにがいたいのかをわざわざ時間を止めて書いて見しているからだ。他の咲夜の能力を知らない人たちはきつと『い、いつ書いたんだ？』といった感じのことを思っていることは確定でしよう。

「……………この十六夜さんのプレイに関して詳しく教えてほしい。私も雄二とやるから。」

「翔子、落ち着きなさい。今ならまだ引き返せるわ。」

「副代表、無理よ。ここまでいったらもう無理なのよ。」

……そう……だったのね。

ご愁傷様、雄二。安らかに眠りなさい。貴方はきつと悪霊にでもとりつかれているのよ。私？私は気にしないことにしたわ。だって、どうせついても私も転生させた神様だろうし。

「優子、ありがとう。……翔子、それと駄犬。さっさと入るわよ。」

「……………うん。」

「わん！（わかりました）」

というか、そのスケッチブックがあるなら吠えなくてもいいんじゃない？……ああ、そうだったわね。咲夜だもんね。それと、駄犬って呼んで頬を赤くしないでほしいな。私としてはこういう反応をしたらいいのかわからなくなるから。

ま、そんなことはおいてさっさと中に入る私。なんてスルースキルなのっ！これでかつるっ！！とか……全然思ってたんじゃないんだからねっ！！！！

いや、ホントに。もう私はとっくに勝ってるから。疲労感的に考え

て。

「……よくもやってくれたな、桜華。」

「あら？それは二流の強者が言う言葉よ。流石ね、自分で分かっているなんて。」

「……チツ！どの口が言いやがる。俺がプライドをとるとわかっておきながらこんな戦争を提案するとはなあ。」

そうなのだ。私が提案した学年試召召喚戦争というものは実際は最初から勝ち負けは決まっていたのだ。

そしてそのことに雄二は気付いていた。ここで私は雄二にとっての最大の選択を与えた。『元神童としてのプライド』をとるか『クラス連中に批判を浴びながらも次回を考える』かの二択をを。

結局雄二がとつたのは『プライド』。

そして雄二がとつた選択は翔子にとって最大のチャンスになる。今回のルール、勝った方が負けた方に命令することができる。きっと翔子はこういっだろう。

『私と付き合って』

と。

原作とは違い。完全に雄二が翔子を避けている理由である過去の産物を知っている状態で。

何故知っているか？それは簡単。私が話したからだ。翔子の知り得ない中学での雄二の様子。二つ名。小学生での例の事件の真相。

それらを知った状態でもきつと翔子は言うのだろう。

『大好き』

と。

ならば私がそれを応援しないわけにはいかない。『親友』として、または『心友』として。そして何より『女』として。

確かに元は違う。だからなんだ。私は私だ。男になろうが女になろうが変わりはしない。そう、変わりはしないのだ。性格は。しかし変わる部分は確かにある。

まずは『体つき』。

そして、『思考』。

または『容姿』。

そして何より『自身の在り方』。

自身の在り方。昔の『俺』ならば恋愛など気にも止めずに友情などに全力を注いでいたことだろう。それ自体は『私』も変わらない。結局の所、根本にあるのは『友情』なのだから。

しかし、『俺』と『私』は想いが違う。

『俺』は自身の友達が幸せになれば良い。そのためには相手が本当に大丈夫なのかとはしっかりと考える。たとえウザいと思われようとそれでも友達が幸せになるのなら耐えられる。

でも『私』は両方が幸せになって欲しい。確かにこの二人は私の友達だ。でも、そんなことは関係ない。勝手にすればいい。そう勝手にすればいいのだ。寸前までは手伝ってあげよう。後は勝手にしろ。友達が悩みに悩んで選んだ恋なのだ。例えそれが気紛れの恋だとしても私が口をだしていい問題じゃない。確かに両方が幸せになって欲しい。だからこそ私は放置をするのだ。無責任で矛盾している？そう言われれば私はこう言うだろう。

『だから？』

だからなんなの？寸前までは手伝ってあげただろう？その後を自分達の手でなんとかできなければ今後がうまく行くわけがないだろう？それとも馬鹿みたいに他人に縋って生きていくのか？

それこそ不幸だ。幸せとはほど遠い。

醜くとも生きていければいい。苦しい生活だが幸せだからいい。良い言葉だ。それは賛成しよう。だが、それは逃げでしかない。今の自分の状態を省みず良い方向へと目を背けているだけだ。

そんな状態で何が幸せか。これだけ幸せがあつたらいいなどという奴もいるが、それは謙虚なのか？本心なのか？

私にはただ諦めているようにしか見えない。私は友達にそんな風な『幸せ（不幸）』を送ってほしくない。だから放置するのだ。それが私にできる最大のプレゼントだと思うから……。

だから、私は下準備をしまおう。

全てはこの二人、『霧島翔子』と『坂本雄二』の最高ね幸せの為に。

「雄二、貴方をお願いするわ。翔子と決着を付けなさい。全ての決着を……。」

私の言葉に呆然と立ち尽くす雄二。けど、私は無視する。下準備を終わらすために。

「雄二、貴方に問いかけるわ。貴方に決着を付ける覚悟はあるのかしら？」

ゆっくりと、それでいてはつきりと。言葉が脳内に焼き付くように。

「雄二、貴方に再度問いかけるわ。貴方に全てを終わらせる覚悟はあるかしら？……翔子にはできている。」

誰にも邪魔をさせはしない。この場だけは、この瞬間だけは。私の全力を出してでも……っ！

私は今まで隠していた覇気を出す。教室内を全て包み込み、圧力をかけるような覇気を。

「答えなさい坂本雄二っ！貴様に覚悟があるのかをっ！！」

私と決着と学年戦争・・・（後編）（前書き）

ちよつと内容が薄っぺらいような気が……

私と決着と学年戦争・・・（後編）

私の覇気に何も言えないのか、それともただ単純に私の質問に答えることができないのかはわからないが、完璧に押し黙る雄二。

そんな雄二に私は無言の圧力を送る。もちろん他の人にはわからないように。何故だか咲夜はすぐに気づいたみたいだけど。

うつすらと汗をかく雄二。まだ雄二は凄い方だ。同じ教室内にいる生徒の半分ほどは膝をついているし、その他の生徒もなんとか堪えているといった感じなのだ。そんな中、雄二はうつすらと汗をかくぐらいにとどめている。私の覇気になれている咲夜は例外だが、普通なら他の生徒と同じ惨状になるのが普通なのだけだ……

「桜華、それは選択権は本当にあるのか？」

「ええ、あるわよ？決着をつけるか馬鹿みたいに……昔みたいに逃げるかの二択だけだね。」

『この性悪が……』と言いながら舌打ちする雄二。

まったく……失礼しちゃうわね。私にそんなこと言うところわいメイドとかが暴走するわよ？

「上等だ。『決着』、つけてやるうじゃねえかつ！」

「……翔子。」

「……………うん。」

雄二の決意を聞いた私は翔子に前に行くように促す。それに応えて前に行く翔子。翔子が足を前に動かそうとすると同時に私は覇気をとめる。

もう、ここから先に私は必要ないのだから。

） 翔子 side ）

「……………雄二。私は負けるわけにはいかない。代表として……
…そして、桜華の親友として……っ！！」

「……………そうか。だが、俺にもFクラス代表としての、元神童としての矜持がある。そうやすやすと負けるわけにはいかねえ……………」

各々の心情を露わにしながら舞台はどんどん整っていく。

私は本当に良い親友に出会ったとおもう。

そんな親友が見ている前で負ける訳にはいかない。……………必ず勝つてみせるっ！

「……………高橋教諭、Aクラス代表霧島翔子がFクラス代表の坂本雄二に総合科目勝負を挑みますっ！」

「承認します。」

「「試獣召喚っ！！」」

私と雄二の召喚獣が魔法陣と一緒に姿を現す。雄二はメリケンサックを持ったまるで不良のような容姿をした召喚獣。私は両刃剣を持った騎士のような召喚獣。

私は召喚が成功したと同時に召喚獣を走らせる。これは勝負じゃない。…………戦争。仲間たちが作ってきた道のりを私達は通ってきた。私たちの為に作ってもらった勝利への道筋を閉ざすわけにはいかない。ゆえに卑怯などという言葉はどこにも存在しない。

この状況で卑怯などと言うものなら私はその人とはあまり仲良くなれそうにもない。なるうとも思わない。

「……らあっ！」

でも、雄二はそれが解っていたかのようにカウンターをくらわそうと召喚獣の拳を思いっきり放つ。

しかし、私は雄二の召喚獣の拳についているメリケンサックを滑らせて間合いに入り込む。そしてそのまま……一閃。

『Aクラス

霧島翔子

総合科目

4520点

VS

Fクラス

坂本雄二

総合科

目 993点』

『Aクラス

霧島翔子

総合科目

4460点

VS

Fクラス

坂本雄二

総合科

目 723点』

どうやらかすっただけ見たい。でもかすっただけでもあそこまでダ

メージを与えることができるならまだまだ勝つ見込みはある。雄二からのカウンターを受け流したときに両刃剣の金属がちよつと欠けて、それが私の召喚獣に当たったみたいで少し点数が減ったけど……多分大丈夫。

「翔子、まさかてめえ……」

「……………うん。」

雄二が何を言いたいのが解るから返事を返す。雄二はその答えを聞いて少し不機嫌そうに私に言い放ってくる。

「あれはお前の勘違いだと言ってるだろうがっ!」

「……………勘違いなんかじゃない。……………私は桜華に全て聞いた上で雄二に言いたいことがある。」

「っ!?!……………桜華てめえなんで知ってやがるっ!?!」

「……………」

雄二の言葉に桜華は答えない。それどころかどこからか椅子を持ってきて十六夜さんに足をなめさせている。……………今度アレも教えてもらおう。そんな桜華と十六夜さんの様子を見た優子の弟がぶつぶつと言ってるけど……………ここからじゃ全然聞こえない。

私たちの関係と初の戦争に決着がついた瞬間だった。

私と勝利とお願いと・・・（前書き）

前話が短かったから少し頑張って作ってみました。

まあ、此方も短いですが（笑）

私と勝利とお願いと・・・

「……………雄二、私達の勝ち。」

「……………殺せ」

よかったね雄二。吉井は根本に色々されてるから殴られることはないよ。

ん？ああ、いつものアレ？して欲しいの？

仕方ないなあ……………じゃあ、やるよ？

やつほー、皆のアイドル桜華・Scerlet・Tyirei・天月だよ

なんだか最近咲夜が面白いことをしだしたよ。なんとどこから椅子を取り出して私の素足をなめだしたんだ。笑えるよねっ！あつははは……………笑えない。

それを見た優子の弟、秀吉が『ふむ……………あれが女王キャラというもののじゃろうか？勉強になる。……………ワシもレパトリーを増やす為にやらせてもらえんじやろうか？』とか不穏なことを言っていたのが印象的だねっ！！

ま、それを見た咲夜が『桜華・S・T・天月を愛する会 NO・4』と書かれたカードを取り出そうとした方が印象的だったけどねっ！！

咲夜に私を愛する会は何人ぐらいいるかを駄目もとで聞いてみたら答えてくれたよ！なんていったと思う？

『幻想郷の住人と文月学園、この街の住人、ネット住人を合わせて10000万人は余裕ですね。』

だってっ！……もう何も言えない。

「……………約束。」

「……………わかってる。だが、本当に勘違いでもなんでもないんだな？」

「ええ、違うわよ。私の情報網に隙はないわ。」

「……………本当に、意味が解らないな。お前は。」

失礼な。私は異常で例外な幻想を司る吸血鬼なだけよ。それ以外の何物でもないんだからね。

「……………雄二、私と付き合って。」

おうふ……恋する少女は直球だね。まったく……FFF団がいたら雄二が異端者審問にかけられているところだよ？まあ、そんなことは知らないだろうからこんな人前で言えるんだろうけどね。

それに、私達Aクラスの生徒たちは翔子の事情も知ってるから何も言わないしね。

それにしてもさあ、咲夜と秀吉は何をしているのかしら？

なんだか『今度一緒に桜華様の足を綺麗にしましょう。』『そうじゃな。ワシも今から楽しみじゃ。』『い、十六夜さん？わ、私もいいかしら？』とか聞こえるんだけど……？え？あれ？優子さん？何をしてらっしゃいますの？なに？もしかして貴女そういうプレイが好きだったとか？そして男子諸君。なんでそんなに『俺もやりてえなあ……』的な目で私を見ているのかな？

私は身体は女だけど、根本は男なんだよ？それなのに男が好きになるはずが……ない……？あれ？それって私が完全にレス娘だつてこと？

……これは諦めてそういうプレイを楽しむべきなのかな？元男として……。

そんな迷ってる私をおいて話は進んでいく。

「……拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く。」

「……仕方がない。俺も男だ。」

雄二はそう言っすんなりと翔子の後に続いていく。

まったく……やっと終わったわね。

「咲夜。私達も帰るわよ。」

「わん。（了解致しました。）」

久々に幻想郷を回ってみようかしら……ああ、でも怖いわね。神が
言っていた通りとなると大体が若干咲夜が入るってことだし……。

どうしようかしら。

「あ、天月殿、そ、その……」

「あら、木下君？なにか私に用？」

「う、うむ。わ、ワシと遊びに行かぬか？」

「……。」

はっ！？こ、この私が思考停止したですって！？

いや、まあそんなことはずっとなんだけど……主に咲夜のせいだね。

「……だめ、かの？」

ちよ、涙目＋上目使いはせこいわよ！これでもさっきレズッ娘だつて気づいたところなんだからっ！

「……いいわ。咲夜、先に帰ってなさい。私は木下君……面倒だから秀吉でいいわね。秀吉と『二人』で出掛けるから。……この意味わかるわよね？」

「……わん。（……畏まりました。会員達にも伝えます。）」

「紫達もよ？」

「……。」

返事はないけど……大丈夫でしょう。こういった時の私に逆らったら無視することにしてるから。

私大好きな奴らには最高の威力になるはずよ。ま、私が自覚しているからできる技だけだね。

「では行きましょう？エスコートは任せたわよ？」

「任せるのじゃっ！」

どう楽しませてくれるのか、楽しみね。

私と秀吉とお出掛けと・・・

やつほー、皆の女王様の桜華様だよ

さあ、跪きなさいっ！とか言いたくなるね。

今は秀吉とデートしてるの。他から見たら女子同士で遊びに行ってるようなものだけだね。

「秀吉。貴方はどこへ連れて行ってくれるのかしら？」

完全にお嬢様を演じる。制服ながらも気品を溢れだたせ、扇子で口元を隠し上品さを保たせる。間違ってもここで紫みたいに胡散臭くはならないように注意する。

「そ、そうじゃな。映画館にでも行かぬか？」

「映画館？……なにか見るものあったかしら？」

「うむ。『紅魔館の主と演劇バカ』というもののなのじゃが……」

「……良いんじゃないかしら。」

ニコツと笑って見せるけど、内心は紫を何十発か殴ってるわ。だってこんなことするの紫ぐらいしかないんだもの。仕方がないと思うわ。

「で、では行くとするかの。／＼／＼」

「手……忘れてるわよ、執事さん？」

「む……畏まりました、お嬢様。では、お手を此方に……」

「ふふ……宜しく頼むわ。」

いつの間にか主と執事の設定で映画館に行くことになった私達。楽しそうだからいいかな？

） 秀吉 side ）

「お嬢様、映画館が見えてまいりましたよ。」

「あら、もう？あまり通らない道のりだったからか、少し早く感じてしまうわね。」

上品な気を漂わせながらワシの手をとりついてくる天月殿。天月殿を見ているとなんだか胸がときどきしてくる。これはやはり恋なのじゃろうか？

しかし、天月殿と恋仲になるとしたらと思うと……はつきり言つてソツとするぞい。なんといつたつてあの昨月の人数で89679人を超えた『桜華・S・T・天月を愛する会』を全員説得しなければならんのじゃから……。

まったくいつて不可能じゃろう。幸いなことに、創造主である十六夜殿には『貴方でしたら……まだ、いいでしょう。しかし、まずは執事としてです。貴方の全てをさらけ出し、我々が納得しなければ……貴方は塵と化します。我々の相手をするということはそういうことです。それをお忘れな気よう……』と言われたので挑戦する価値はあるはずじゃ。失敗すれば塵と化すそうじゃが……そのよくなことに遅れをとつていては恋などできるはずもない。ならばできるだけやってみようではないか。挑戦するかどうかは今できることをやって、様子を見てからじゃな。

「あら？あれ……翔子と雄二？さつそく手錠プレイとは色々と問題な恋人関係ね。」

「そうでございますね。しかし、あれはあれで『通』な楽しみ方と言えるのではないのでしょうか？……お嬢様もやられますか？」

そういいながらワシも手錠を取り出す。……なんだか身体が熱くなってきたのじゃ。やってもらいたいと素直に叫びたいぐらいに衝動がおさまらぬ。きっと今のワシは眼がウルウルとなっていることじやろつ。……上目使いもするべきかのう？とある台本に『涙目＋上目使いは重要っ！特に意中の異性をときめかせるにはねっ！！』P・S・特に秀吉君。』と書いてあったからのう。やってみても大丈夫じやろつ。演劇は嘘をつかん。騙すのはワシらの仕事じゃからの。

「……そう、ね。二人きりなら考えてあげるわ。」

「ありがたき幸せ。では、チケットはありますのでさっさと入ることにいたしましょう。」

「雄二達に会わなくてもいいのかしら？」

「はい。今の私は天月殿の執事。私の行動理由は天月殿ただ一人の為にあります。」

「……ふふ、正解よ。今の貴方は私だけの物なのだから……」

独占欲というか……なんというのじやろつか。しかし、ワシも天月殿にこういうことを言われても嫌な気分になぞまったくなりはしない。むしろ嬉しい感じじゃ。

そうか、十六夜殿はこういうことをいつも感じておったのじゃな。なるほど、これは癖になる気持ちよさじゃ。このまま天月殿の家の執事になるのもやぶさかではないのう。

「……御意。全ては天月殿の為に。……では参りましょう。そろそろ始まってしまいます。」

「ふふ……そうね。」

雄二、明久。すまぬな。ワシは今、此方の方が大切なのじゃ。

私と執事とお出掛け・・・（前書き）

更新速度が低くなったorz

学校がない日とか終わってから少し書いたりしてるけどなかなか進まない。これでバイトしたらどうなるんだろ？

笑えるね。否、笑えない（反語

私と執事とお出掛け・・・

- - 私に不可能はないわ。

- - 部長……なにを言ってるのじゃ。

- - なにつて……ナニ？

- - なにをいつておるのかさっぱりじゃ

- - まったく……こんな冗談も通じないとは……世も末だと思わない？

- - ……はあ

と、いうわけだね。先に言っておくわ。上は私達じゃないわよ？もちろん紫アレンジの映画に決まってるじゃない。

咲夜はともかく、私はあんな下品なこと言わないわよ。紫とは一週間口を聞かないことにするわ。

「あ、天月殿。少々刺激的で面白かったのう。」

「ええ、そうね。……それで？」

「そ、それで……とは？（あ、天月殿の不機嫌さが限界突破寸前なのじゃーっ！ー）」

「貴方は意図的にこんなものを見せにきたのかと聞いているのよ。」

「

何故私が怒っているのか知りたい？なら、教えてあげる。さっきの映画、ポルノ系の映画だったのよ。つまり18禁。ここのチケット売りの定員は適当だからにも言わなかったのでしょうね。

「ち、違うぞいつ！これは八雲殿という方から頂いたもので……」

「そう、わかったわ。今回は許してあげる。」

「あ、ありがとうなのじゃっ！」

紫え……延期よ。1ヶ月無視するわ。1ヶ月ですまされるのよ？感謝しなさい。

さて、なんだか萎えてしまったポルノ映画も見終わっただし……することがないわね……やっぱりここは男性にリードして貰いましょうか。

「秀吉くん、次はどこにいくのかしら？」

「む？そうじゃの……喫茶店なんかどうじゃ？」

「喫茶店ね……いいわ、行きましょう。咲夜の紅茶とどれくらいの差があるのかを知るのも一つの経験だわ。」

「ならば行くとするかの。……ほれ」

「ふふ、ありがとう。」

私はそういつて出された手を取り一緒に歩く。それは一種のレズビアン達と桜華・S・T・天月を愛する会の会員達の嫉妬と羨ましいといった視線とが集まるだけの出来事だった。

いや、私は認めない。認めてあげるものですか……ぐすん

「それにしても、どこにいくつもりなの？」

「『ラ・ペディス』というところなのじゃが……なかなか評判な店だと聞いておる。文月学園にその店長の娘が通っているという噂もある店じゃ。」

「……へえ」

……いやです。行きたくありませんっ！！とはいえない私。だって

……私、一応原作知識持つてるんだよ？薄れないように脳にプロテクターかけて保護してるし。

で、原作知識を持ったうえで言わしてもらっわ。

絶対に行きたくないっ！！

理由？理由はね、美春がいるからよ。美春の大好きなお姉さまは誰だと思っ？原作通り、美波よ。ええ、美波もいるわ。うん、『もね？あの人外少女は私まで好きになっちまいやがったんのよっ！！』まあ、発信器とか盗聴器は流石にとってもらってるけどね。咲夜にだって、幻想郷の場所がばれたらだめでしょ？そのところはしっかりとしなきゃ幻想郷が滅亡したら洒落にならないことになるから……

まあ、あの幻想郷に入り込んだりしたら即死になると思うわ。気にしないけど……元は人間でも今は妖怪よ？『死』に私はあまり興味ないから……身内以外わね。流石に身内が死んだりしたら泣くと思っわ。だって……好きだし……

も、もちろんここにいる人間も好きよ？でもあくまで他人。少々仲良くなったからといって私は涙を流さない。そんな人間はもう見あきたから……この身体には多分魅力チートでもついているのでしょう。だから妖怪であっても人間が近寄って友達になる。……私はそんな友達の死を何回も見てきた。だから……泣かない。

……ふふ、今から喫茶店に行くのに変な雰囲気になっちゃったわね。気にしなくていいわ。

私と秀吉と喫茶・・・

「……私、ここに入る気がなくなったのだけれど？」

「心配しなくてもよい。あれはこの喫茶店特有のパフォーマンスである『父と娘の修羅場』というものらしいのじゃ。……まあ、これはこの喫茶店のマスターの妻が宣伝していることなんじゃがな？」

「……私、少し過保護な親は結構好きだけど……ここまできたら家出するわね。」

「それには同意するぞい。」

久しぶり

みんなの女王様の桜華・S・T・天月だよ

なんだか目の前の喫茶店で親子らしき人達が戦闘……否、戦争してるよ。喫茶店の客達が普通に飲食してて、そのギャップが激しすぎてついていけない……。

多分、わかっている方もいるかもだけど……目の前の喫茶店は私達の行き先のラ・ペデイス。その店内では店長らしき男とその娘らしき女子高校生が激しい戦いを繰り広げている。

おわかり頂けただろうか……店長の娘らしき女子高校生とは『清水^{ミハル}美春』といって、私を一年生の頃から追いかけて回してくる女子高
校生だ。

彼女は毎回毎回私の服に発信機と盗聴器をわからないように仕掛けて、私の居場所と会話を完全に把握しようとする……なんというか……行き過ぎた愛。そう、ヤンデレだ。しかもレス。つまり新種の『レスビアン・ヤンデレ』なのだ。もはや人外。怖いと言いたい。

「どうするのかしら？」

「……どうするもこうするもここまできたならば入らねばなるまい。」

「そうね。……じゃ、入りましょう？」

「うむ……。」

やっぱりというべきか、秀吉も入ることをためらっているみたいだ。当然だと思う。だって、想像してみても？ 貴方達が評判がいいという噂を聞いてやってきた店が父と娘の修羅場を間近で見ることになるのよ？ しかも、その娘、しかもヤンデレに好意を抱かれていますという状況下で中に入ったら巻き込まれるのは当然のこと。

貴方達はこんな状況下で普通に店内に入る勇氣はあるかしら？ 私はないわ。ないけど……逆らえないうんめいもあるのよ……。

あの娘には私と美波に対するレーダー的なものが備わっているから、うかつに近づけないのよね。今は修羅場のおかげでまだばれていないみたいけど……店内に入ったら完ぺきにばれる。

ああ……神よ。なぜ私を見捨てたのですか？ていうか神^{シン}、テメエ表でろ。今すぐ滅してやるからっ！さあっ！！さあっ！！！！

（遠慮します。ていうか久々に私を呼んだと思ったらいきなりなんですか？病んでるんですか？大丈夫ですか？……男性から女性にしたのに問題があったのですかね？ふむ……やっぱり私の趣味通りに特定の人に対してだけヤンデレ、クーデレ、ツンデレ、デレデレを使い分ける幼児体系のシヨタとkあにしておいた方が良かったですかね？）

（やめてっ！？それだけはっ！それだけはやめてくださいませ！！今のままで十分ですっ！！！！生意気言ってすみませんでしたっ！！！！）

（転生させた神に勝てると思った時点で貴女はGAME OVERだったのです。馬鹿め。）

くっ……この毒舌馬鹿神が……無性にいらつく！

でもこれ以上逆らったら能力となくされる恐れがあるし……ああ、誰かこのイラツキを発散させてくれないかしら……っ！！

「ディアマイドウタアアアアアアッ！！！！！！！！！！」

「近づかないくださいこの豚野郎がつ！死になさいっ！！今すぐにつ！！！！」

「ならば一緒にお風呂に入ろうっ！さあさあさあっ！！」

「キモイですっ！！私が一緒に入るのはお姉さま達だけですっ！！」

「ディアマイドウウタアアアアアッツ！！！！！！！！」

……なに……これ……っ！？ここまで嫌悪感を抱いた生物はあの店長が始めてよ。会話にすら成り立っていない。しかも、自分の娘に対してセクハラ行為。キモイ……キモすぎる。でも、あの店長の様子が私達の周りに男がいたときの反応に似すぎて……どう反応したらいいかわからない！！

とにかくこれだけ断言するわ。

キモイ。

うん。キモイ。皆知っている中で一番嫌悪感を抱く生物で有名な某Gさんなみにキモイ。はつきりいつて近づきたくない。

「木下君、帰るわよ。」

「……うむ。流石にここはいやなのじゃ。」

「木下君、貴方はうちの執事をするって聞いたのだけど？」

「うむ。十六夜殿にOKをもらったのじゃ。」

「……ならいいわ。そろそろあの子も気づく頃だし」
「……」

「……？この気配はお姉さまっ！？」
「……」

「？なにをいって」
「……」

「……」

今、私達がいるのは幻想郷に行くための隠れ家である商店街の路地裏にいる。そこでは咲夜が紅茶を飲みながらくつろいでいた。

「お帰りなさいませ桜華様。……おや、木下様もつれてこられたのですか？」

「ええ、貴方がOKしたのでしょ？ならば大丈夫と考えて能力も使ってきたわ。」

「そうでしたか。幻想郷に危機をもたらすようなことをした場合私は私が責任を持って始末致しますので……」

「当然よ。貴女にはそれをする義務がある。我々の唯一の樂園を

壊さないためのね。」

「……はい。」

私と執事と楽園と・・・（前編）

「木下君……いいえ、違うわね。」

私は言おうとした言葉を切る。何故なら今から話すのにこの口調……つまり『桜華・S・T・天月』としての私ではなく、『幻想郷のバランスを担う内の一人』であり、『紅魔館の主』である私が一番適切だと感じたからだ。

なので紅魔館の主として、覇気・闘気・鋭気を出しつつ、高慢さ・気品・厳格さなどを出しながら宣言する。

「……木下秀吉。貴殿にはまず、死んで貰う。」

「……どういうことじゃ？」

意外と冷静な秀吉にビックリ仰天している紅魔館の主こと私、桜華様は商店街の路地の先に隠してある隠れ家で秀吉に死んで貰うことにしました（キリッ）

あ、もちろん死んで貰うといってもアレだよ？物理的に死んで貰うわけじゃないよ？

秀吉には現世……つまり幻想郷からいうと外界の常識を持っている秀吉に死んで貰うってこと。

「私が言わないとわからないのか？」

「……わからぬ。」

「その表情にその言動を発するまでに至った間……なんとなくわかつていのではないのか？ただわかりたくないと思っただけではないのか？正直に言うがよい。……なに、殺したりはせぬ。私は紅魔館の主であり、パワーバランスを担う者の一人なのだ。懷は大きいつもりだ。……少なくともそこのパワーバランスを担う者達よりはな。」

「……わからぬ。ただ、ワシが死ぬということに別の意味があることはわかったのじゃ。」

「……ほう？ならば説明してやろう。…咲夜。」

「はい。」

そういつて私の右後ろにいた咲夜が右前へとでる。

え？私が説明しないのかつて？

するわけじゃない。だって……面倒なもの。

……ちよつと？今さつき寝てばかりで式に仕事を任せっぱなしの某隙間妖怪（覗き妖怪）みたいと言った奴出てきなさい。

今すぐ、私の椅子にしてあげるから。

感謝しなさいよ。私の椅子に成りたいっていう奴なら何人もいるんだから……美鈴とか魔理紗とか紫とか（ボソツ

あれ？なんでパワーバランスが私の椅子になりたがってるんだろう？しかも魔理紗って……（ブツブツ

「改めて自己紹介させて頂きます。私の名前は十六夜咲夜。桜華様専属メイドをさせて頂いております。以後、よろしく致します。」

片手を胸に当て、さながら執事のように秀吉に頭を垂れる咲夜。

「う、うむ。」

「恐れながら私めが説明致します。木下秀吉様、微妙に感づいていらつしやるようですが……それは間違いです。桜華様が貴方様に言ったことの真意は貴方様が言葉の通りなのです。貴方様に死んで貰う。つまり、貴方様の外界での常識……つまり貴方様が住んでいらつしやるこの現世での常識と共に今の貴方様には死んで貰うとい

うことです。」

「ど、どういことなのじゃっ!？」

まあ、普通はそうなるよね。普通に死ねと言ってるんだし

咲夜もアレだね。微妙に性格悪いよね。本格的な説明をヒント程度にしか与えないんだから……

それで執事としての技量を計ってるなら秀吉は微妙ってことになるけど……あれはあれでプロとしてのプライドがあるからね。技量を計るなら計るでその採点は厳しい。咲夜はメイドとしての完成系といてもいいぐらいの技量を持っている。いうならばメイドのプロというものだ。

「ここまで言っても気づきませんか……ならばはつきりと言いましょう。貴方様には人間を辞めてもらいます。」

「……は？」

そりゃあそうなるわね。だって秀吉は私達が普通じゃないとは知らないんだし。まあ、あの文月学園に通っている生徒の大多数はふうじゃないんだけれども……。

「簡潔に述べましょう。私は時を操る人間であり、桜華様は幻想を司る吸血鬼です。そして紅魔館がある場所、幻想郷は私達のように

な『化物』と『人間』が共存する最後の楽園なのです。貴方は人間ですので、そのまま人間として人里で暮らしてもいいのですが……貴方様は紅魔館の……桜華様の執事になることを前提とし、私たちについてきました。この時点で貴方様には『人間のままでいることは不可能』なのです。紅魔館は夜の王が住む館。その場所で生きていくとなると人間では耐えきれずに『玩具として生きていく』か『食糧として』夜の王である桜華様達に尽くすことしかできません。」

「……。」

「もちろん貴方様にはこの一件を拒否するという選択もございます。今なら貴方様の記憶を消し、元の生活に戻すことも可能です。しかし、これ以上貴方様が私たちの楽園に近づき、この場所を表にするというのなら……私が貴方様をこの世から葬り去ることになります。」

「……。」

無言を貫く秀吉。普通ならば断る。何故ならば彼には大切な日常が存在するからだ、文月での友人達とバカをやって楽しむ日常、そして家での姉やその他の家族との日常。今までの彼は楽しい生活を送っていたはずだ。少なくとも私より……いいえ、『私達』よりは。

私は唇を開く。彼には酷なことも知れないが考えさせる時間はない。私達がこれ以上話して口を滑らしたりでもしたら彼には唯一の楽園を守るために問答無用で犠牲になってもらうことになるのだから。

「……問おう。貴殿に……我らが樂園にて生きていく覚悟はあるか？」

「……っ！」

私の問いに少し唇を噛む秀吉。私はそんな秀吉を無視し、言葉を続ける。

「貴殿に覚悟があるというのなら……その覚悟、我らに魅せてみようっ……！」

「……わ、ワシは……」

私と執事と楽園と・・・（後編）

「わ、ワシは……それでも天月殿について行きたいのじゃっ！」

「……では、違う問いにも答えて貰う。貴殿の家族はどうする？私の執事をするということは住み込むか、貴殿の家族を幻想入りさせ、人里に住ませる必要がある。なんだったら紅魔館で全員雇ってもいい。」

「そ、それは……ワシには決められぬのじゃ」

前回、秀吉に早く決めるよ似非爺。こっちはくたびれてるだよオラアとか言って（言ってない）秀吉を苛めていた（苛めてない）桜華様だよ

なに？私がいつ記憶を捏造したっていうの？

え？いま？なにいつてるの？バカなの？死ぬの？

あ、待って

帰らないで

私が悪かったからあつ！

あ、ごめん。ちょっとキャラが崩壊しちゃったね

え？キモイ？そりゃあどうもすみませんっした（．．．）キリッ
ちよつ、嘘だからっ！嘘だから帰ろうとしないでっ！？

「……ふ、ふふ、フハハハハハハハッ！！いや、すまぬな。
私は貴殿を試していたのだよ。我が里、幻想郷は全てを受け入れる
秘境の地。」

「な、なんじゃ……騙したのかの？」

「いいや？大体は本当のことだ。幻想郷に常識は通用しない。そ
れに私、桜華・S・T・天月人間ではない。種族的には吸血鬼と
いったモノ達の一人だ。私の妹たちもな。私の一番下の妹は破壊を
司り、二番目の妹は運命を司る。そして私はその中でも異質の吸血
鬼。幻想……つまり全てを司る吸血鬼だ。」

流石の秀吉も呆然とするしかないようです（．．．）キリッ

「木下秀吉。貴殿は一度自身の家に帰るがよい。そして私に仕え
るかを選択してくるといい。もちろん貴殿の家族の許可もとるのだ
ぞ？……そうだな、期間は一週間程度だ。それ以内に私に話しかけ
てこい。さすれば答えを聞こう。そして来なかった場合は……記憶
を消すだけだ」

まあ、そういうことだ。

私ははつきりいつてしまうと他人が嫌いだ。

ナルシスト？

少し違う。私は『嘘をつき、平気で他人を貶める奴』、『自身が良かったら周りなどどうでもいい』などといった思考や思想を持っている奴が嫌いなのだ。秀吉は演劇というモノの中で嘘をつき貶めることを生業としている。

仕方ないと言で終わらしてしまうと簡単だろう。

でも私はどうしてもそういった奴らを許せない。なんせ私が吸血鬼になった理由も『そういった』奴らのせいなのだから。

だから私はFクラス入りを拒否した。基本転生者などといった奴らはFクラスに入り、私の嫌いなことを平然とやってしまう。Fクラス代表坂本雄二もその一人だが、私は彼のことはまだ好きな方だ。彼は嘘をついても根に持たず、一緒にバカをしあえる仲間に対して嘘……いや、虚言を言う。一種の本当の友愛を創るために。

彼は無意識にやっているのだろう。小学校で神童といわれ、中学からは一匹狼を気取りながら他者との喧嘩に明け暮れる日々。

あるいはそういった日常から脱する為に利用していることも考えられるが……私は彼のことは去年ずっと一緒だったので否定することができる。

それに対して秀吉はまだなにも知らない……いわば他人だ。そうやすやすと信用、信賴することはできない。

だから私は彼を試す。

彼を知るために。

私と学園祭とAクラス・・・（前書き）

遅れましたorz

言い訳を申しますと…修学旅行と準備に手間取り、書く時間も他人の作品も見ろ暇がありませんでした！（・・・）キリッ

え？私用じゃないかって（・・）？

そうですね。ごめんなさいm（――）m

私と学園祭とAクラス・・・

桜が舞い散り初め、学園には新たな季節がやってきた。

そう。文化祭だ。いや、この学園風に言うと『清涼祭』だ。

そんな清涼祭が目前に迫ったいつも通りのある日のこと。私はいつものように咲夜に紅茶を入れさせ、優雅にティータイムを楽しんでいた。

「ちょっと、副代表っ！紅茶なんか飲んでこっち手伝ってよっ！！」

「優子。なんかとはなにかしら？今すぐに全国の紅茶と紅茶好き、紅茶を作ってる人とかの紅茶に関わる人達全員に謝りなさい。」

「なんでよっ！？ていうか嫌よっ！！」

「あ、土下座でね。咲夜、紅茶のお代わりをお願い。」

「かしこまりました。」

「なんで土下座なのっ！？それに十六夜さんも普通にスルーしないでくれないかしらっ！？……って代表もなに寛いでるのよっ！

「！」

「……………紅茶は文化。」

「意味分らないからっ！そんなドヤ顔されても反応に困るだけだからっ！！」

「「「優子（木下様）、うるさい（です）。カルシウムがたりてないの（ではないですか？）」「」」

「なんなのそのシンクロ率はっ！？ていうか十六夜さんはなんで私の前にヒジキを置くのっ！？」

「ヒジキにはカルシウムがたっぷり入っておりますので……いえ。気にしないで下さい。これはほんのお礼ですので。……嘘ですが（ボソッ）」

「あれ？十六夜さん？今なんて言ったの？聞き取れなかったわ。」

「黙れこのBL破廉恥痴女が。」

「なんだか罵倒されたっ！？じゃなくて、誰がBL破廉恥痴女よっ！！」

「あなたですがなにか？」

「違うわよっ！」

「「「優子（木下様）、うるさい（です）。少しは落ち着たら？（どうですか？）」「」」

「さて……と。咲夜、翔子。優子も精神が崩壊しそうだし……そろそろ手伝うわよ?」

「……………わかった」

「かしこまりました。」

「……………なんでそんな嫌々してあげますよみたいな顔するのかわからない……………」

やあ、みんな

優子を虐め「……………いじるのに時間をかけちゃって挨拶が遅くなったわね。」

今は清涼祭の季節。

原作では姫路がなんたらかんたら言ってたけど……………それよりもAクラスにまでFクラスの事情を持ち込むのは勘弁だわ。やっぱりFクラスはダブルメーカーよね。面倒な……………。

別に友達とかなら普通に助けるけど別段好きでも嫌いでもない奴の為に自分を犠牲にする必要なんかないしね。個人論だけど。

これをFクラスに聞かしたらなにかいわれそう……………馬鹿だし平和そうな雰囲気をつんぷんとまき散らしてるからね。私や咲夜とは違って闇の部分とかなさそうだし。

秀吉とかは闇がありそうな感じかな?男らしく見せようとしてるのは間違われるからだけじゃないと思うんだよね。まあ、現時点では感でしかないんだけどね。そのうち許可とって昔を少し覗かせて貰

うとしよう。私の執事になるのだっただけど……もしものときは主人命令とか使ってもね。そのかわりといったらんだけど私の昔を教えてあげるのもいいかもしれないわ。

なんといつたって家族だもの。せめて仮に裏切られても家族にだけは優しくしてあげたいし知っていたい。なんにも知らなかったら他人と変わらないし……私が嘘をつかれても、裏切られてるとわかりきっていてもこれだけは言うと思う。

『私は貴方の主人になり、愛するわ。貴方は家族になりなさい。嘘をついても、裏切ってもいい。契約を破棄するには私を一回でもいい……殺しなさい。』

それでも私が、注意しないとイケないことはする。常識などもはや常識ではない幻想郷でもそれぐらいの思いは持っていたい。これは私の完全な本心。

昔、咲夜と美鈴に言われた言葉が頭から離れたことなど一度もない。

「桜華様は私に愛を下さりました。殺人を犯し、追われ、操り人形かのようにただただ無心に人を殺し、軽蔑の意を向けることが当たり前なこんな私に。家族の愛を下さりました。私に家族は居ませんでした。これがこれだけはつきりしたことです。何があるかと、私は桜華様について行きます。私は桜華様だけの私でありたいのです。」

「桜華様には吸血鬼としての弱点が全くなく、負けることなどあ

りえないほどの強さです。しかし、私にはそれを抜きにしても貴女についていく理由があります。それは愛です。私達妖怪は基本孤独な存在。この幻想郷の理性がある妖怪達や鬼などは例外的ですね。群を組む妖怪もいますがそれは基本的に弱小妖怪や同族だけです。私は一人一種妖怪。しかも氣を使い妖怪や人間達と仲良くなるうとする少々異質な一人一種妖怪です。だからこそ孤独だった。そんな私に家族を与え、愛を与えてくれました私にとってそれだけで一生ついていくに値するんです。あ、もちろん誰でもよかったとかじゃありませんよ？桜華様だからです。」

ああ、ヤバい。思いだしたら泣きそうになってきた。私はいい家族を持ったわね。

私と清涼祭とAクラス・・・（前書き）

すみませんm（――）m

久しぶりの投稿のクセにめっちゃくちゃ短いです（^――^；）

しかも切り方が……とにかくすみませんm（――）mm（――）
m

私と清涼祭とAクラス・・・

「桜華・S・T・天月。あんた、私に協力する気はないか」

「嫌よ。寝言は寝て言いなさい。だから貴女は妖怪なのよ。」

「……召喚大会があるだろう？」

「話ぐらい聞きなさいよ性悪妖怪ババア」

「……実はね。あれの優勝者とドッキリで闘って欲しいんだよ。」

「誰がやるって言ったのかしら？馬鹿なの？死ぬの？というか死になさい。今すぐに。……なに一人じゃ死ねないの？そんなんだから貴女は藤堂カヲルなのよ。」

「……もちろん報酬は上げるさね。あんたが望むことを一つなんでもしようじゃないか。……どうだい？」

「嫌だつて言ってるでしょう？なに？それでスルーできてるのも思ってるのかしら？しかも報酬が一つ？舐めてるのかしら？私がたった一つ程度で動くと思ってる時点で貴女の脳は戦国時代なのよ。」

やあ

学園長に呼ばれたと思ったら意味分からないことを言われたので苛

ついて口が滑っちゃった桜華様だよ

仕方ないよね。

……だって報酬が一つだけなのよ？舐めてるとしか言いようがないわ。この紅魔館の主である私を動かそうと言っのならもつと付け加えなさいよ戦国大名がっ！

あら？また口が勝手に……。まったく……駄目ね。私の口は本当のことしかいわないみたいだから。」

「……もはや知ってだろう……」

「なんのことかわからないわね。妄想の中で被害者面してもらっても困るわ。……で？報酬の一つは『能力の追加』として、後いくつ報酬を出してくれるのかしら？後、言っておくけど咲夜に頼むっていうのは無理よ？私からの命令がないと動かないから。……優秀なメイドね。ほればれするわ。」

本当に……私には勿体無いぐらい優秀なメイドよ。私が能力でいくらでも性能の良いメイド人形を作るのに作らないのは私の近くにいつも咲夜が居てくれるからでしょうね。

紅魔館からすると咲夜は女房役かな？私は大黒柱？ふふ……そういったのも家族って感じがしていいわね。

なんだか気分が良くなってきた。まあ、気分も良くなったしこれを受けてあげましょう。なんていったって私、優しいもの

私とメイドと暇つぶし・・・（前書き）

約一ヶ月ぶり？

泣ける遅さ……しかし書く時間ナッシング（――；）

本当にすみません（――）

私とメイドと暇つぶし・・・

優しい私は結局、報酬を一つ貰う代わりに試験召喚大会の決勝戦で勝った方が優勝で手には入る商品进行、腕輪の能力を客達に見せびらかした後に戦うらしい。

entertainment。つまり余興ってことね。

戦闘科目は総合科目。さらに私にはハンデとして試合開始時に召喚獣を立たせている場所の半径5cm。直径でいうと10cm程度しか移動してはいけないらしい。さらにさらに能力を使用する事も許可されていないという……………冗談じゃないわね。

相手が翔子達だったら勝つことが不可能だわ。

まあ、私も私個人としてのプライドがあるから簡単には負けてあげる気はないけどね。

それにしても

「今回の清涼祭は大変になりそうね。」

教頭室の扉の横に身体を預けていた私はそのまま上を仰ぎ見る。ま

るで天井の先に広がる大空を見つめているかのような眼差しで。

今年の清涼祭にはレミリアやフラン達も来るっていうのに……ね。

） 咲夜 side ）

お久しぶりでございます。

私、十六夜咲夜は桜華様より一時的な休暇を言い渡された所でございます。

それでもこの格好は止めるつもりはありませんが……だって、この格好は桜華様にお仕えしている証。楽しみも悲しみも嬉しさも残念さも…全てを供にしてきたモノ。もはや私の身体の一部と言ってもよろしいくらいですから。

とにかく私は絶賛暇つぶし探し中なので御座います。

「それにしても……Fクラスは相も変わらず馬鹿ですね。」

教諭の方々が言うにはFクラスだけが清涼祭の企画が決定していないそうです。……なのに……はあ……。

何故野球？桜華様によると確かFクラス代表の坂本雄二は興味がないことにはとことん興味がないらしいですし、それが原因なのではないか？

「その所、どうなんですか？」

「……まあ、なんだ？お前はなんでここにいる？」

しかし、何故私は審判をしているのでしょうか？まあ、坂本雄二の事を聞く良いチャンスですし……よしとしますか。

彼は私に返事を返しながらもピッチャーの吉井明久に指示を送る。残念ながらこちらからは見えないのでどんな指示を出したかはわからないのですけれど。

「私は大体清涼祭の準備が終わり、桜華様に少しのお暇を貰いましたので……。それで、どうなんですか？」

「まあ、なんだ……本当だ……」「霧島様のことが好きなのですか？」……ちげえだろっ！？最初の質問と全く違うぞっ！？」

「……ふう……全く坂本様も運の良い。せっかくこの録音機に録音して霧島様に届けてあげようと思っていたのですが……」

「こええっ！？このメイドなんて恐ろしい事を平然とやりやがる

んだっ!？」

ふむ。これは良い暇つぶしになりそうですね。

そこには黒い笑みを浮かべているメイドがいたとか……………

私と清涼祭と幻想郷・・・（前書き）

この小説はじめてましての第三者視点を入れてみました

初めてなので不出来かも知んですが……（-.-;）

私と清涼祭と幻想郷・・・

さあ、始めようか……貴様の魂のストックは充分か？

我は意外と足りていない。

何故なら

今日が

かの

有名な

文月学園の

清涼祭だからだっ！！

このように心の中で発言をしてしまった桜華はきつとこのときキリッとしていたことだろう。

きたよ。きちやったよ。きやがったよ。の三段活用でお送りする桜華の精神的疲労を溜めまくるであろう清涼祭がっ！

今回は紅魔館に桜華の防御用スペルカードを作るときに元にした実践向きの結界を張ってきたから紅魔館組全員は学校に來ている。桜華の家がそれなりに裕福だということはメイドである咲夜がいつも隣にすることからわかっていだろうからきつと驚かれたりはしないだろう。

因みに防御用スペルカードの名前は「幻符『死之神屑・シノカミクス-』」。まずは敷地を全て囲う程の巨大な結界を五重にしてかけて、周りを妖力で創られた見えない系により罫を仕掛ける。この時に妖力を使っているとバレないように感覚を鈍らす幻が結界を中心に展開されている。そして、その見えない系に触れた場合そこに向かって四方八方から神力で創られた、もはや神槍の類になる槍がかなりの速度で射出される。あくまで『かなり』だ。幻により感覚が鈍っているのでそれでも避けるのは至難の技だが、大妖怪レベルまでいくと避けることも可能だ。しかし、幻想郷の桜華の知り合いがそのレベルまで達している者ばかりではないことも事実。そこで、桜華の知り合いにだけわかるように能力でした靈力で『只今外出中。入るべからず。』の文字をいたるところに書きまくり、入らせないように工夫したりとしているので問題はない。

そんなこんなで紅魔館はもはや要塞のような装備で守られているので心配は皆無。

問題の紅魔館組は今現在、Aクラスの桜華の周りにパイプイスを置き、座っている。桜華と咲夜が学園長や教頭、先生を説得して回った結果がコレだ。桜華は優等生。気配りができる出来た子。裕福な

家庭だが他人を下に見ない良い子などという高評価をいつも受けているので意外と簡単に許可が取れた。

学園長は……まあ、いつも通りなのだが。

因みに言つと学園長は桜華が妖怪だということや、幻想郷の事などは全く知らない。ただ、天才で頭が周り、不思議な力を少し使える程度の認識だつたりする。

「にしても凄い可愛いわね、天月さんの妹さんたち。」

「でしょう？私の自慢の妹たちよ。」

フランとレミリアを微笑ましそうに見ながら言う愛子に桜華は自慢気に笑い、二人の頭を愛おしそうに撫でる。そんな桜華に撫でられている二人は幸せそうな表情で足を振り子のように前後に振つたり、幸せそうにしながらも必死に威厳を保とうとしながらもやはり微笑んでしまっていたりと、とても可愛いと言う言葉がピッタシな行動をしている。

事実、そんな二人を見てAクラスの女子や男子は「可愛い」「や俺にもあんな妹がいたらもつと頑張れるのになぁ……」などといった声が聞こえてくる程だ。

「へえ、そんな話もあるんだ。」

「ええ。他にもギリシャ神話には全知全能の神とされるゼウスが娘のアテネを……」

そんな中優子とパチユリーは色々と本に関する話題で盛り上がっている。本が好きという共通点からか、もう友達と言って良いほどの快活とした話だった。近くでは小悪魔も話に耳を傾けており、時々知っている所を補足したり紅茶を淹れたりと楽しそうにしている。

「……………紅はいつもなにをしてるの？」

「門番ですよ。休憩時は花の手入れや鍛錬ですかね。」

「……………凄い。でも休む時に休まないと体壊す。」

「大丈夫ですよ……………といたい所ですが、ありがとうございませ
す 気をつけますね」

「……………うん。」

美鈴は翔子と日常に関する会話をしていた。翔子は美鈴が妖怪だということを知らないので大丈夫といった所で心配するだけだろう。だから美鈴は気をつけると返した。実際つらい仕事だということは翔子もわかっているということが話す感じで分かったのだろう。そこは流石というべきだろう。流石武闘家。流石気使い。武闘家だから、気使いだからといってできるわけもないが、気にしないことにした。美鈴も長年生きた妖怪。わかるものはわかるのだろう。きっとそうに違いない。

何故なら中国だから！

パクリとか凄い中国だから！凄いです。パクリ率……

「桜華様、隙間は誰を連れてくるつもりなのでしょう……」

「さあ……ね。パワーバランスとか結界のことを含めて考えても後数人って所じゃないかしら？考えられるのは紫、文、魔理沙、妹紅ね。慧音は人里、霊夢と藍は結界、幽香は花達を守らないといけなし、輝夜は二ト。個人的に来て欲しくないのは妖精達とその仲間達、幽々子、鬼達ね。理由は簡単、清涼祭が潰れる。私が精神的疲労で死ぬ。」

「来たら殺しましょう。」

「……そうしてちょうだい。」

紫が来るであろうことは確定している事で咲夜は未だに妹たちを撫で続けている桜華に誰が来るかを聞いてみる。心の中では『これが……ナデポ。私にはしてくれないのでしょうか……。ああ、想像しただけでもう……。』とか思いながらも自身の予想する幻想郷の住人を上げていく。ついでに来て欲しくない人々も。そんな桜華の言葉を聞いた咲夜は真剣な表情をしながらも眼には殺意を抱きながら言葉を返す。どうしても良くなったのか、それともあのメンバーならば別に大丈夫だと感じたのかは不明だが了承する桜華。その口元はひくついていた。

過保護過ぎワロタ。

うん、私が精神的疲労で死ぬって言った後、即答しやがったよこのメイド。

来たら殺しましょう。

殺気で咲夜の周りに少し隙ができてるぐらいだから。まあ、いつも一緒にいるメンバーは普段通りに話し合ってるけどね。心臓に毛が生えているんじゃないかって思うほどいつも通り。逆に怖いよ。

「愛子、後何分ぐらいで清涼祭開始なの？」

「うんと……後、10分だね。どうしたの？」

「少しFクラスに用があってね。いえ、Fクラスというより雄二に、ね。」

そういつつ私はフランとレミリアを撫でている手を休ませ、席を立つ。撫でている手をどけた瞬間に二人が悲しそうな顔と声を出したときは抱きしめてあげようか迷ったが、なんとか理性をフルスロットルさせて耐えた。よくやった私。

それに伴って紅魔館組、つまり、咲夜、美鈴、フラン、レミリア、パチュリー、小悪魔と一緒にいてこようと席を立つ。

「……………私も行く。」

「私も」

「私も行くわ。」

Aクラスの主要メンバーがなにを言ってるのよ。しかも内のメンバー全員でいったらFクラス男子が凄い勢いで近づいてくるでしょうに。

「駄目よ。貴女達も着いてきたらAクラスが起動しないじゃない。特に翔子、貴女が私に着いてきたらAクラスの準備が回らなくなるでしょ？すぐに帰ってくるから待っていてちょうだい。私と貴女達は……………まあ、いても邪魔なだけかしらね……………着いてきても大丈夫でしょう。」

「……………桜華、ずるい。」

「邪魔って……事実ですけど……」

「翔子、ちょっとだけだから我慢して頂戴。優子達も我慢してくれてるんだから。後、美鈴。口答えするなら減給ね。」

「ええっ!？」

まあ、Fクラスの外に雄二を連れてきたら大丈夫でしょう。ムツツリーニは咲夜に任せたら大丈夫だしね。

まあ、とにかく行きますかあ

私と清涼祭とFクラス・・・（前書き）

連続投稿：ということになるのでしょうか？短いですが、話しを進めるにはキリがいいのでここまでにしました。

私と清涼祭とFクラス・・・

やあ、結局紅魔館組と一緒にFクラスに行くことになった桜華ちゃまだよん

流石にこのメンバーは異彩を放っているからか、廊下にいる生徒からの視線が物凄く突き刺さってくる。

「それじゃあ、少しここで待っていて頂戴。呼んでくるから。」

「いえ、桜華様がここにいて下さい。私が呼んできますので。」

「そう？ならよろしくお願いするわ。」

Fクラスについたから私が呼びにいくとすると咲夜が呼びにいくと言ってきた。

これぐらい別にいいのに……。まあ、頼むことにしたけど。だって面倒じゃない？それをかって出してくれるんだから儲かりモノと思っ
て任せた方が得策じゃないかしら？

「お待たせ致しました。」

「俺に用ってなんだ？もうすぐ開店なんだ。早くしてくれ。」

そうこうしていると咲夜が雄二を連れてきた。というか雄二、このメンバーの前でそういう言葉遣いは危ないわよ？今にも殺さんと紅魔館組、私の家族が殺気を纏ってるからね。私が手で抑えなかったら貴方即死よ？

「まあ、そう急かすならコレは必要ないのかしら。貴方に必要な情報をそれなりに集めてあげたのに……」

そう言いながら私は正方形に折り畳んだB5の紙を指で挟みながら挑発的に笑みを浮かべてみせる。雄二はそんな私を怪訝に見ながらもその内容を推し量っているかのよいにも見える。ああ見えて元振神童だから頭の回転は物凄く速い。きっと雄二はこの紙を手にとるでしょう。

「……………対価は？」

ほら乗ってきた。賢い選択ができる人物でよかったわ。まあ、そういう人物だと知っていて情報を出したのだけれど。

「この情報に見合う程度の報酬。それが見合う程度の貸しでいいわ。」

「のった。」

悪徳な笑みでそういう雄二。良い笑みだわ。

「この情報を教えて良いのは秀吉と土屋君ね。後は顔やらなんやらに出るからお勧めしないわ。」

「ああ、分かっている。後日、報酬について話し合つとしよう。」

「ええ。皆、帰るわよ。そろそろ開始の時間だしね。」

番外、清涼祭。その頃の彼女は（1）（前書き）

今回は要望もあって番外です。相も変わらずキャラ崩壊はしていますが…（苦笑）

では今回は彼女です。

番外、清涼祭。その頃の彼女は（１）

） side?? ）

退屈。

彼女がいない。たったそれだけのことなのに……たったそれだけのことで私の世界はこんなにも色あせる。彼女が数日来ないだけで世界はこんなにも澁んで見える。

私はいつものようにお茶を飲んでまったりとしようと思うが、何故かできない。ただただ私の中にできた空虚を埋めてくれる存在を待ち望んで空を眺めているだけ。

桜華。

彼女と会ったのは彼女の妹であるレミリア・スカーレットが異変を起こしたとき。正確には私がレミリアを倒し、意気揚々と神社へと帰ろうとした時だった。

「あら？どこに行こうとしているのかしら？」

ぞわりとした感覚が身体中を巡り巡った。私は本能的に前に飛んで後ろを見ると、私がいたところには月の反射で綺麗に光る直径5mはありそうな槍が突き刺さっていた。私は睨めつけるように槍が飛んできたであろう場所へと目を向ける。

そこには

『幻想』

がいた。

私にもこの表現でいいのかわからないけれど、この表現でしか合わないとも感じる。まさに幻想。

月夜に照らされ、煌めく金と青紫のメツシユの髪。まるで夜に愛されているかのようにその姿は清々しいまでに美しかった。

そんな彼女に見惚れていると彼女の緋色の瞳が私を射抜く。まるで全てを見抜くようなその瞳に私は少しの恐怖を抱き後ずさる。

「私の妹が馬鹿をやってしまったみたいね。ごめんなさい。この紅魔館の主である私、桜華・Scarlet・Thirrie・天月からお詫びするわ。さっそくだけど……私、紅魔館の主として決着をつけないといけないと思うのだけれど……どう思うかしら？」

「べ、別にいいんじゃないかしら？」

私はなんだか戦ってはいけないように感じて戦うことを拒否しようとする。なんだか傷つけてはいけないという概念が押しつけられたような気分になった。

「それもそうね。この子も私が寝ている間にこんなこととして……
そんなに暇だったのかしら？まあ、いいわ。この赤い霧はすぐに拡
散してあげる。」

そういうと彼女は私にはわからない言葉で話した。だけど、そ
の言葉を話したとたんに私にとってもない威圧感が放出された。

「まあ、こんなものでしょう。どう？一応魔力でできていたみた
いだから魔力で反対属性を作り出して消滅させてみたのだけれど……
…なにか空気に不快感を感じたりするかしら？」

「……特にないわ。」

私も魔法などには詳しくはないけれど、即座にこの霧の属性を導き
出して、その反対の属性を作り出す何て並みの魔法使いでもできな
いと思う。それをレミリアの姉だと名乗る彼女は簡単にしてしまっ
た。魔理沙も彼女のような人物に師事してもらったらいいのに等と
思ってしまうのは仕方がないことだと思って勘弁してほしい。

こうしてこの異変は終わりを告げた。

……にしても、本当になんで来ないのかしら。

べ、別にさびしいとかじゃないけれど……じゃないんだけど……ああ、むしゃくしゃする。

いっそのこと桜華の行っているとかいう学び舎に行ってみようかしら。というかなんでいまさら学び舎？いつも通り私のところに来たらいいのに……そしたら紫とかの馬鹿たちから守ってあげるのに。

そういえば、清涼祭……だったかしら？紫達が行くとか言っていたわね。私を無視して桜華に会いに行くなんて……許せない行為だわ。

今度会ったら夢想封印でもくらわしてあげようかしらね。桜華と一緒に叩き潰すというのもありかしら？今のうちに考えときましよう。

……私を置いて行った罪は大きいわよ？

私と清涼祭と始まり・・・

ついに清涼祭が始まった。結局始まるまで紫達は来なかったけれど、来たら来たで殴る（従者達が）からまあ良かったと思っておこう。

私達Aクラスは文月学園が清涼祭をするに当たって配るチラシにでかでかと載る。言うならば文月学園の顔なのだ。なので私達はチラシ配りは全くする必要がない。他クラスは直径3cm程度の大きさの写真が載っているので少し配ればいいが、Fクラスなんて全く載っていない。つまりFクラスは自分達でチラシを作って配らなければならないのだが……我が二年のFクラスは全く配る気配がない。何故ならばこの文月学園ならではの催し物である『試験召喚大会』なるものがあるからだ。おそらくだがコレでFクラスの宣伝をするのだろう。

まあ、それはおいておいてなにがいたいかというと……

「いらっしやいませお嬢様方。此方の席へどうぞ。」

Aクラス、快調でございます。

開始直前にはもう列ができていたからますます意味がわからない。こういうのは男の人が多いとは思っていたけど意外と女の人も多い。

ていうか五分五分な感じ？何故？

あ、そういえばAクラスのチラシで私と翔子が代表と副代表ということでもメイド服で載っていたけど……それが原因？いや、でも写真だけじゃ無理よね。……女の人の説明がつかないわ。なら文を考えた優子と愛子のせい？

一番可能性があるわね。

というかなんでさっきから私が案内するのは女の人ばかりなの？なんで私の顔を見ると顔を赤くするの？私、なんかしたかしら？

「……相変わらず副代表の破壊力は抜群ね。」

「あはは……私でもたまにドキッとするもん。あのオーラを初めての人がくらったらああなるよ。ていうか天月さんに気づかれないようにお客さんに『桜華・S・T・天月を愛する会へのお薦めと入会の手続き。』とかいうチラシを配っている十六夜さんも負けず劣らず凄いけどね。」

「お陰様で会員数が東京の人口の三分の二程までになりました。」

なにしてんのよっ！？

というかなんでそんなに私人気あるのっ！？こんなだったらアイドル目指した方が良かったんじゃないかしら？

……なろうかしら……別世界で。ID LM@ST Rの世界とか
良いんじゃないかしら。うん、良いわね。あはははは

「あ、副代表が遠い眼を شدしたわ。」

「本当だ。それでも絵になるのが凄いね。」

「ああ桜華様……流石です」

デメエらいつか殴る。

絶対に。

おっと、怒りのあまり男の頃に返ろうとしてたわ。全く……怖いものね。感情というものは。

因みに私達がやっているのはメイド喫茶。何故か男女両方から凄い勢いで手が上がり、私以外の満場一致で決まった。意味がわからない。なんで皆さん私を見て手を上げてたの？虐めですか？虐めなんです。わかります。

あれ？

眼から汗が……

「あ、副代表が涙を流し出したわ。」

「本当だ。やっぱり絵になるね。」

「お、桜華様……ふつくしい……」

許さない。

絶対になアッ！！

おっとまた男に……やれやれね

ただ一つ言わしてくれないかしら？

（ ・ ・ ） クソガッ

ああ、なんだかすつきりした気分よ。良かつたわ、破壊活動に勤しむことにならなそうね。主に人体の解剖なんて興味が出てきてたのに……命拾いしたわね。

私と清涼祭とAクラス・・・（前書き）

どうも

今日が誕生日な作者です（笑）

誕生日だからなにかやりたかったのですが……思いっかなかったの
で勘弁です（苦笑）

今回、神隠しの共犯者さんとコラボさせて頂きました。そちらの方
も是非見て下さいね

私と清涼祭とAクラス・・・

「にしてもやっぱり二年生からの出場者が多いわね。優子と翔子も出てみたいだしね。」

「そうですね。Eクラスの代表以外の二年生の代表は出場するみたいですから。」

「どうやら二年生は今回の清涼祭を楽しむ予定のようね。まあ、三年生になると進学やら就職やらで色々と忙しくなるから仕方がないといったら仕方がないのだけれど……」

「まあ、私には関係ないけれどね。だって私、財産なら結構あるし、幻想郷の物価って結構安いから私からしたらどうやって今を楽しもうかとか、そっちのほうが大切なことだしね。」

「咲夜、そろそろ雄二が来るころだろうから準備だけしておいてちょうだい。」

「かしこまりました。奥の部屋をご用意しておきます。」

「宜しく願いますわ。」

それから十分後に雄二が来た。秀吉とムツリーニを連れて。予想からしてこの二人には話したのだろう。まあ、話すと思っていたから特に問題はないけれど……今回のことは私たちの企みがばれたらおしまいだからね。少し慎重に事を運んでほしいとか思ってしまうのは私の勝手かしらね。

「雄二、よく来たわ。二人には話したのでしょう？なら咲夜についていってちょうだい。そこで話すから。」

「わかった。十六夜、宜しく頼む。」

「かしこまりました。」

そう言いながらほとんど無言状態で咲夜の後ろについていく雄二、秀吉、ムツリーニの三人。私も愛子に断りを入れてからついていく。ちなみにだが優子と翔子は試験召喚大会の予選で戦っている。まあ、あの二人のことだから速攻でおわるでしょうね。この話を聞かれないためにもさっさと話してしましましょう。

「さて雄二。本題に入るけど……その前に質問は？」

「当然ある。この情報に関してはお前のことだ……ガセ情報は流さないだろう。だが、こいつらに話して本当に良かったのかどうかにかんしては聞きたいな。」

「そうね。秀吉に関してはその演劇力。今回の作戦には必然的に必要になってくるわ。後は土屋君ね。彼はおそらくこの学園とその

付近に隠しカメラを仕掛けているはずよ。その彼が持つ情報力は私たちの武器になる。私たちも情報は集められるけど彼ほどすばやく集めることは不可能よ。それに彼も無口であり表情に表わさないというところでも高評価よ。」

「……なるほどな。とにかく納得はしておこう。で？本題とはなんだ？」

「そうね。今回の黒幕……つまり竹原教頭先生のことなんだけど……おそらくあの小悪党は手段を選ばないわ。Fクラスが邪魔することが分かるとそのうち付近のヤンキー共を使って誘拐でもさせるでしょう。それで今回の試験召喚大会の商品である十二力をゲットするために送り込んだ三年生のAクラス生徒で勝ちにくるでしょう。……ここまではいいかしら？」

「ああ。」

「ち、ちよつと待つてほしいのじゃっ！！」

ここで初めて話す秀吉。あれ？雄二に簡単に説明するように紙に書いてあげたのにしてないのかしら？遠まわしに話をする時間は少ないとも伝えてあったんだけど……。とりあえずジト目で雄二を見つめてみる。

「ジトーーーーー」

「……」

「ジトーーーーー」

「……………口で言うなよ……………」

「うるさいゴリラ」

なんだか誰がゴリラだとかほざいてるけど私的にはこの鼻血を出しているメイド長が問題なのよ。相も変わらず変態なのね。ムツリー二も鼻血を出しているし……………秀吉は顔を赤らめているし……………この学園は変態ばかりね。嘆かわしいわ。……………おもに私の癒しの場所があまりないことでね。

「とにかく……………秀吉、どうしたのかしら？」

「黒幕がどうか、誘拐がどうか……………意味がわからないのじゃ。詳しく話してくれんかの？」

「無理。時間がないわ。それは説明を怠った雄二に聞いてちょうだい。」

「……………わかったのじゃ。」

とにかく話をつづけましょう。もう少ししたら翔子たちがかえてくるはずだから。

それにしても……………こうやって作戦を話しているといい刺激になるわね。頭がさえてくるわ。昔に戻ってくるみたい……………。

「（桜華様……まさか……）」

私と清涼祭と衝動・・・（前書き）

なんとか次話完成。

シリアスとか良い言葉は難しい（-o-;）

私と清涼祭と衝動・・・

清涼祭。つまりは祭り。私に祭りを楽しむ時間ができるなんてね。

こうして祭りを楽しんでいるとどうしてもある一つの考えが頭の中を過ぎつて本心からこの祭りを楽しむことができない。

ダメね。昔から祭りっていうのは楽しむものだと思っていたのにね。やっぱり昔を思い出してしまっからかしら……咲夜達にもどうやら心配掛けてるみたいだし、気をつけないといけないわね。

「咲夜、愛子。私は一回外すから後はよろしくね。」

今回、私は雄二達との契約を守るために、時々抜ける代わりに休憩の時間はいらなという苦渋の選択で抜けることを許されている。

フランやレミリア達には悪いけど我慢して貰うことにしましょう。

「秀吉、今のところなにかあ……」なんだこのきつたねえ机はよおっ!!」「……絶賛バカ発生中みたいね。」

「……うむ。申し訳ないのじゃが頼むのじゃ。」

「わかったわ。ま、大船に乗ったつもりで見ときなさい」

そついいながら私は暴れているハゲとモヒカンのもとへと歩いていく。

その間に「あ、あの子って清涼祭の広告に出てた……」やら「あ、天月様っ！？なんでここに……」やら「ああ……なんて神々しいのかしら……お仕置きされたいわぁ……」やら聞こえてきた。

……やめて……このままだとこの街での私の有名度が限りなく増えていくわね。……咲夜、貴女を奴隷にしてあげるわ。ええ、もちろん貴女にとってご褒美だということはわかりきっているわ。……わかってはいるけど……私にはやるべきときがあるのよ……っ！！

「ねえ、貴方達。」

「ああ？」

「なんかようか？」

……どうしてかしら。こいつらが良い人に見えてきたわ。私のことを知らないからかしらね。あの変態度をいつも間近で見てたから……

「初めまして……になるわね。私の名前は桜華・S・T・天月というの。よろしくね。」

「あ、ああ……」

「よ、よろしくな。」

どうしようっ！？本気でこいつらが良い人に思えるっ！？こいつら……うちの門番にしようかしら……美鈴の睡眠時間が少ないからね。

「私はFクラスの生徒じゃなくてAクラスの生徒なのだけれど……同じAクラスの先輩の貴方達にお願いがあるのよ。聞いてくれるかしら？」

「まあ……内容によるな。……で？」

私は少し間をとる。

それによって次第に周りの生徒や客が私に目を向けてくるのが手にとるかのようになる。

「……去ね。」

カリスマ発動っ！

桜華の迫力が大幅に増した。

覇気発動っ！

桜華の女王様力が大幅に増した。

「ここはFクラス。

私達文月学園の生徒が事情がわからない筈がないでしょうっ！貴方達はFクラスの……後輩の楽しみを壊した貴方達は何がしたいの？営業妨害？ただの嫌がらせ？……それとも誰かにやらされてるのかしら？」

「っっ！？」

正解みたいね。

まあ、だいたいこの学園ど営業妨害をするなんてそういったやからぐらいしかないからなんとなくわかってはいたけれど……

実際に……私の後ろからの視線が強まったしね。正確には窓側の方

だけれど

「まあ……いいわ。因みに、ここはあの西村教諭の担当するクラスなのよ？不衛生なまま清涼祭で喫茶店をやらせる訳がないわ。まあ、もう一度言ってあげるわ。」

そこで私は冷や汗をかいているハゲとモヒカンに向けて少々殺気をこもらせて睨みつける。

「去ねっ！ここに貴様等の居場所はないっ！！」

そこには半泣きになりながら逃げ惑う先輩方と悔しがり、桜華を睨

めつけながら出て行く竹原教頭。

そして

大歓声を上げ、桜華を褒め称えるFクラスの生徒と客達がいた。

駄目だわ。

楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい
楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい
楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい
シイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイ
タノシイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイタノ
シイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイタノシイ
シイ

……またなの？これは……レミリア？

[illegible]

フラン？

苦しい痛い助けてやめて苦しい痛い痛い痛い死ぬ死ぬシ又しぬ
死ぬ痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

パチューリー？

そう

やっぱり例え幻想を司っても皆の苦しみをなくすることはできないのね。

私が代わりに苦しみを受け継いであげるだけしか

でも……そろそろ私の中の獣が暴れ回りたいと疼いて止まないみたいね。

あの……すべてを喰い殺した獣が……

……ああ……

誰か

助
け
て

番外、清涼祭。 その頃の彼女は（2）（前書き）

今回は番外編

番外は番外だけで集めようかと考えている今日この頃

モコタンのキャラをどうしようか迷ったけど原作寄りのキャラに。
二次創作で王道の男勝利キャラは辞めました（笑）

番外、清涼祭。その頃の彼女は（2）

「いやあ、外の世界ってこんなにお技術力が発展してるんだな。」

「そうね。まあ、この焼き鳥より私が焼いた焼き鳥のほうがおいしいけどね。」

「それには同意するぜ。」

金髪に白黒のエプロンドレスを身に纏った少女と、銀髪でモンペを履いて、髪のところどころに赤いリボンをしている少女といった、コスプレとしか言えないような姿をした二人が文月学園の学園祭、つまり清涼祭を歩き回っていた。

二人は校舎外でやっていた屋台で買った焼き鳥やたこ焼きといった食べ物を食べ歩きしている。その姿は容姿がいいだけに周りの学生や客たちの視線を集めている。そんな彼女らの名前は『霧雨 魔理沙』と『藤原 妹紅』という。二人とも幻想郷の住人で、大まかに分けると人間と不死者といったカテゴリに入る二人なのだが、そんなの関係ないと言わんばかりの仲の良さだ。当然ながら二人は桜華の良き友人……一人は良き変態なのだが……いや、変態に良いも悪いもないような気もしないでもないが……まあ、気にしたら負けなのだろう。色々と。

「それにしても隙間妖怪の奴どこに行っただ？ 私たちを学園内に放り込んだ途端にどこかに即移動したみたいだし……」

「さあ？ どうでもいいんじゃない？ どうせ魔理沙の場合、桜華に会えたらいいんじゃないの？」

「んなっ！？ なななななにを言っているのかさっぱりなんだぜ
／／／／／」

「……わかりやすい。」

そう。霧雨 魔理沙は桜華のことが好きなのだ。女子同士なのに。いわゆるレズビアン、百合などと呼ばれる人たちの一種なのだ。魔理沙が変態と呼ばれる由縁はそこにある。彼女は桜華に対してどういった態度で接したらいいのかわからない一端の乙女なのだ。彼女はどうしたかわからないが故に近くの彼女が好きな人物と同じような態度で接してしまうようになり、変態の一角として周りに知られるようになってしまった。魔理沙が参考にしたのは十六夜 咲夜。桜華の間近にあり、いつでもどこでも彼女と共に過ごしている彼女を参考にしたのだ。もちろん、咲夜と桜華の間に家族としての絆があることは分かっているが、そこを無視してもあの距離感に魔理沙にとってとてもうらやましかったのである。

そんな魔理沙が咲夜から受け継いってしまったのはM気質。そんな氣質を受け継いでしまった彼女は桜華にいじめられたいと思ってしまうようになってしまった。無自覚に。

それに引き換え藤原 妹紅は桜華とは良い友人関係を築いている。その関係は『博麗 ハクレイ 霊夢 レイム』や『八雲 ヤクモ 藍 ラン』と同じくらいと彼女自身

も自負している。それほどまでに仲がいいのだ。また、それほどまでの友人という点でいえば彼女の親友『カミシラサワ上白澤 ケイネ慧音』もそれと同等といえるだろう。

誤解をしないように言っておくが、彼女は人見知りをするほうだ。桜華と会って改善しつつはあるが、それでも完全に抜けるはずがなく他人と話すのも魔理沙や慧音、桜華等といった仲がいい人物と一緒にでなければほとんど話さない。

「それで、いつ桜華に会いに行くの？」

「……終りのほうでいんじゃないか？桜華もこの学び舎の学生なんだろう？だったら最後のほうでピークを過ぎたりしてからのほうが桜華にとってもいいだろう？」

「……そういう頭の使い方を桜華の前でしていたら変態の称号なんてもらわないのに……」

「あ、あれは緊張してパニックになっているだけだぜっ！」

「それでも残念だね。色々と。」

そっついながら妹紅は魔理沙の胸を凝視する。それに気付いた魔理沙は手に持っていたたこ焼きを落とさないようにしながら胸を隠す。魔理沙の顔は赤く染まっている。逆に妹紅のほうはいたずらが成功したかのような表情をしており、それらの様子は第三者から見てもとても楽しそうな雰囲気醸し出していた。

「ま、今は遊ぼうか。幻想郷に来てからは初めての外だしね。こういった滅多にない機会は大切に使わなきゃ。」

「そうだな。お、あれなんかいいんじゃないか？『合唱部 世紀末メドレー』。」

「……なんだか『汚物は消毒だあっ！』とか叫ぶモヒカンとかが頭に浮かんだんだけど……まあいいか。じゃあ、一回見ていこう。」

その後、二人が合唱部の演奏から抜け出したのは言うまでもない。それを隙間から覗いていた紫がクスクスと笑っていたのも言うまでもないことだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0103s/>

私とAクラスと召喚獣

2011年12月31日16時49分発行